

都市計画街路事業 高砂橋架替工事
国道152号線道路改良事業東高遠工区

高 遠 城 番 小 屋 遺 跡
武 家 屋 敷 遺 跡

(唐木邸跡・伊藤邸跡・大曾根邸跡)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996.3

高 遠 町 教 育 委 員 会
伊 那 建 設 事 務 所

都市計画街路事業 高砂橋架替工事
国道152号線道路改良事業東高遠工区

高遠城 番小屋遺跡 武家屋敷遺跡

(唐木邸跡・伊藤邸跡・大曾根邸跡)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996.3

高遠町教育委員会
伊那建設事務所



景園城遊苑の紅葉

発刊にあたって

今回の発掘調査地は、史跡高遠城跡指定地の範囲外であります。高遠城が成立していた当時に、番小屋らしき建物があったとされる場所を「番小屋遺跡」とし、武家屋敷の範囲内であった所を「武家屋敷遺跡」として、都市計画街路事業の高砂橋架替工事と、国道152号線道路改良事業東高遠工区の2つの事業によりこれらの遺跡が消滅する恐れがあるため、事前に緊急発掘調査を実施し、遺構の確認と記録保存を図ることを目的として、工事の進捗状況から平成6・7年度に分けて実施しました。

「番小屋遺跡」につきましては6年度で唐木邸を、また、7年度で伊藤邸の調査を実施し、調査面積は合わせて約430㎡であり、いずれも狭い場所で、調査により積まれた土砂を、別の場所に移しながらの困難な調査でありました。これら2箇所の調査の結果、昭和に入ってから町家の遺構については確認できましたが、高遠城に関わる遺構と断定できるものではありませんでした。この場所は藤沢川がS字に蛇行する手前の位置にあり、高遠城に渡るための橋が、当時から下流に架けられていたことから、豪雨の時、橋げたに流木等が絡み、何度も災害を受けた場所であり、調査により藤沢川の砂が堆積された層が確認されました。また、昭和28年3月に現在の高砂橋が架けられ、河床からの橋梁高もこの時崇上げされています。

平成7年度において実施された「武家屋敷遺跡」につきましては、これら番小屋遺跡の東側、藤沢川の河岸段丘上にあり、この場所は、高遠の城主が鳥居氏から内藤氏に代わる1690年頃に書かれたと言われる図面の中に、相頼寺という寺があったと記されている場所と思われる、江戸時代の後半には武家屋敷があったとされる位置でもあります。ここは現在高遠町が所有し、桜を植樹して公園地となっていますが、それ以前の所有者が大曾根さんという方であったので大曾根邸跡としました。この調査地にあつては集石遺構がいくつか確認されているものの、それぞれつながりがつかめず寺院や、武家屋敷に関わる遺構であるとは判断できませんでした。

高遠城跡は昭和48年に史跡に指定され、それ以前の昭和35年には、城跡内に植えられているコヒガンザクラ樹林が県の天然記念物に指定されております。国の史跡という誇るべき地元の文化財でありながら、まだまだ解明されていない部分が多いのも事実であります。結果として高遠城に関わる遺構などの情報は得られなかったものの、この報告書が、後日の研究に役立てられれば幸いです。この調査にあたり、土地の前所有者の方々をはじめ、ご指導を頂いた県教育委員会の先生方、事業主体である伊那建設事務所の皆さんに、この場を借りてお礼申し上げますとともに、調査団長を快く引き受けていただいた友野良一先生をはじめ、ご苦勞をおかけしたにもかかわらず、積極的に作業に参加していただいた作業員の皆さんに、報告書の発刊にあたり心より感謝申し上げます。

平成8年3月

高遠町教育委員会 教育長 山川 廣

例 言

1. 本報告書は、平成6・7年度に実施した、史跡高遠城跡に関わる「番小屋遺跡」並びに「武家屋敷遺跡」の緊急発掘調査報告書である。

2. この緊急発掘調査は、都市計画街路事業の高砂橋架替工事と、国道152号線道路改良事業東高遠工区の2つの事業により遺跡が消滅してしまうため、県の教育委員会と事前に協議を持つ中で実施した緊急発掘調査である。なお、調査年度並びに調査地、遺跡名については下記のとおりである。

(平成6年度発掘調査)

史跡高遠城跡指定地外 唐木邸跡 「番小屋遺跡」

長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2360番地

(平成7年度発掘調査)

史跡高遠城跡指定地外 伊藤邸跡 「番小屋遺跡」

長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2359番地

史跡高遠城跡指定地外 大曾根邸跡 「武家屋敷遺跡」

長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2047-1・2番地

3. この緊急発掘調査は、伊那建設事務所の委託により高遠町教育委員会が実施した。

4. 本報告書は、平成7年度中にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構・遺物を、より多く図示・図版化することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。

5. 本概要報告書の執筆者及び図版制作者は次のとおりである。

○本文執筆者 友野 良一・小松 博康・伊藤 隆博

○図版製作者 友野 良一・小松 博康・丸山まゆみ・伊藤 隆博・西村 恵子

○写真撮影 友野 良一・加藤 俊幸・小松 博康・伊藤 隆博

○遺物整理 友野 良一・小松 博康・丸山まゆみ・奥田 静子

6. 本概要報告書の編集は、主として高遠町教育委員会がおこなった。

7. 遺物及び実測図類は、高遠町教育委員会が保管している。

目 次

口 絵	
発刊にあたって	
例 言	
目 次	
挿 図 目 次	
図 版 目 次	
第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査会の組織	2
第 3 節 発掘調査の経過（調査日誌から）	3
第 II 章 遺跡の環境	9
第 1 節 遺跡の位置	9
第 2 節 地形・地質及び周辺の遺跡分布	10
第 3 節 歴史的環境	13
第 III 章 遺構と遺物	16
第 1 節 調査の概要	16
第 2 節 遺 構	20
第 3 節 遺 物	26
所 見	35
あとがき	42
参考文献	42
写真図版	44

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置図	9
第2図	遺跡付近の地形及び周辺の遺跡分布図	10
第3図	遺跡付近の地質概要図	11
第4図	高遠城跡の地形・地質図	12
第5図	発掘調査箇所位置図	14
第6図	平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況平面図	16
第7図	平成7年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況平・断面図	18
第8図	平成7年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況平面図	19
第9図	平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」遺構出土状況平面図	20
第10図	平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」石垣遺構出土状況実測図	20
第11図	唐木邸間取り図	21
第12図	平成7年度唐木邸跡「番小屋遺跡」遺構出土状況平面図 (第1・第2レベル)	21
第13図	伊藤邸間取り図	22
第14図	平成7年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」遺構出土状況平面図	23
第15図	平成7年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」集石遺構調査断面図	23
第16図	平成7年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」テフラ柱状図	25
第17図	平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物実測図(1)	28
第18図	平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物実測図(2)	29
第19図	平成7年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物実測図	31
第20図	平成7年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査出土遺物実測図	33
第21図	発掘調査出土遺物拓本(古銭)	34
第22図	鳥居氏から内藤氏前期頃の高遠城並びに城下絵図(高遠町図書館蔵)	38
第23図	天保11年頃川面・多賀谷刃傷事件当時武家屋敷見取図 (「伊那路」S41年4月号)	40
第24図	坂本孫四郎住宅地形段面図(想像図)	40
第25図	坂本孫四郎住宅平面図(御家中屋鋪絵図より)	41
第26図	堤陸庵住宅平面図(御家中屋鋪絵図より)	41

図 版 目 次

図版 1	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(1)	45
図版 2	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(2)	46
図版 3	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(3)	47
図版 4	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(4)	48
図版 5	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(5)	49
図版 6	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(6)	50
図版 7	平成 7 年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(1)	51
図版 8	平成 7 年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(2)	52
図版 9	平成 7 年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(3)	53
図版 10	平成 7 年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(4)	54
図版 11	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(1)	55
図版 12	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(2)	56
図版 13	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(3)	57
図版 14	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(4)	58
図版 15	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(5)	59
図版 16	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(6)	60
図版 17	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(1)	61
図版 18	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(2)	62
図版 19	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(3)	63
図版 20	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(4)	64
図版 21	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(5)	65
図版 22	平成 6 年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(6)	66
図版 23	平成 7 年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(1)	67
図版 24	平成 7 年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(2)	68
図版 25	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査出土遺物(1)	69
図版 26	平成 7 年度大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査出土遺物(2)	70

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

(平成 6 年度 唐木邸跡発掘調査)

- 平成 3 年から 県教育委員会文化課との事前協議
- 平成 6 年 8 月 発掘担当者友野良一氏と発掘調査の方法・期間などについて打ち合わせを行なう。
- 平成 6 年 9 月 9 日 発掘調査関係の申請書類の提出。
- 平成 6 年 10 月 13 日 工事に先立ち、事前に発掘調査を行なうようにとの通知あり。

(平成 7 年度 伊藤邸跡・大曾根邸跡発掘調査)

- 平成 7 年 8 月 県教育委員会文化課との事前協議
- 平成 7 年 10 月 18 日 発掘調査関係の申請書類の提出。
- 平成 7 年 11 月 発掘担当者友野良一氏と発掘調査の方法・期間などについて打ち合わせを行なう。

第2節 調査会の組織

○高遠町教育委員会

教育委員長	北原 作英
委員長代理	横田 稚
委 員	中畑 節子
”	阪下 哲彦
教 育 長	山川 庚
教 育 次 長	田中 幸人 (平成7年3月まで)
”	矢沢 秀雄 (平成7年4月から)
社会教育係長	加藤 俊幸 (平成7年3月まで)
”	小松 博康 (平成7年4月から)
社会教育係	小松 博康 (平成7年3月まで)
”	丸山 まゆみ (平成7年3月まで)
”	伊藤 隆博 (平成7年4月から)
”	西村 恵子 (平成7年4月から)

○発掘担当者・調査員

友 野 良 一 (日本考古学協会会員・東洋陶磁学会会員)

第3節 発掘調査の経過

(平成6年度発掘調査)

○「番小屋遺跡」史跡高遠城跡指定地外 唐木跡跡

月・日 調 査 日 誌
1994年
11・7(月)

発掘調査機材の搬入をおこなう、狭い場所であり、テントを張ることはできないので、機材はその都度調査地にシートを掛けて管理することにする。

発掘調査に先立ち、調査団長の友野良一氏より、挨拶と調査方法の説明を受ける。

ベンチは南側渠道との間にH=740.17mを設定する。調査地の表土レベルは、ベンチから1.8m下がってH=738.37mである。調査地を南北に、重機で表土剥ぎの後、幅1mで試掘してみる。藤沢川の砂・砂利・川石などが混じる全くのかく乱土層であり、全体的に表土剥ぎをおこない、全面を掘り下げていくこととする。ただし、南は渠道に接し、北西の辺は町道に接しているなど、周りの石垣に影響をあたえると危険であるので、状況を見ながら調査範囲は狭くなるが、石垣下の勾配を充分取って作業を進めることとする。

表土レベルは、錆びた釘などが出土する。表土とはほぼ同じレベルで、土台石と思われる直径30～40cm大の平石(図版2-1, 2)を2ヶ確認した。続いて表土下約23cmの中央付近から直径28cmの木製の鍋蓋(図版2-6)、直径約10cm、長さ2.3mの丸太(図版2-5)、南北の方向に1.4mまた、その上に重なるように、東西の方向に40cm、厚さ約1.5cmの木板(図版2-4)が出土し、その西側に新たに石垣の頭と思われる配石が確認され、この配石からは、昭和に入ってからと思われる陶器の植木鉢等(図版2-3)が出土している。(作業員10名)

11・8(火)

出土する遺物は相変わらず金物が多い。中央南側に厚さ約3cmの板で南北1.1m、東西60cm・深さ約35cmの「もろ」と思われる穴(図版3-3)を発見し、この中からNo.62のガラスビンが出土した。調査地北側の地表下25cmあたりに、焼け土の部分(図版3-4)が見られ、ここからは特に鉄器の出土が多い。また、西側には現在使われてはいないが、厚さ10cmの現場打ちコンクリートの側溝が、南側が切れた状態で、長さ4mにわたって確認できた。(図版1-3)

午後北東の一區画を深さ1m程度試掘してみた。藤沢川の川砂らしいが厚い層になっており、この中から遺物は発見できなかった。

調査による土置き場を北側に設定していたが、いよいよ土量も多く調査の妨げになるので、以降ダンブにて運び出しながら調査を進めることとする。(作業員10名)

11・9(水)

表土から約50cm掘り下げ、高遠焼きの鉢と思われる陶器片(Na116・図版1-5)が出土する。

ちょうど東南の位置に、コンクリート製で直径1mの桶らしき物が出土(図版4-1・2)。縁は壊されていて中に詰め込まれている。これを取り出すと約5cmの厚みでピリが敷いてあ

た。この南側の石垣の角に当たる部分に集石Na1を確認、暗渠とも思われる。中央付近に厚さ約1.5cmの板で囲んだ、南北に90cm・東西に45cmの四角い箱状のものを発見する（図版4-5・5-1・2）。この中には三峰川のものと思われる砂が詰められており、この東側には金属が固まって出土している（図版3-6）。この遺物の中には鉄板の切れ端、釘、かすがいなどがみられる。調査を進めていくと出土した木箱の下に、重ねられた状態でもう一段あることが判明した。下段は同じ木箱が2ヶ並べられているようで、この中には川砂は入れられていなかった。

西側に頭を出した石垣は、北へ行くほどまだ深く、下段は丸い川石であるのに、時期が違うのか上部には加工してある石を並べてある。

表土下56cmの所から磁器の赤色付けの飯茶碗（Na151・図版4-4）が、完全な状態で出土した。（作業員7名）

11・10(木)

午前中周囲の平板測量をおこなう。中央南側に集石が出土しNa2とする。南側の石垣裾からは、暗渠とも堆積層とも思えるほど、川石がゴロゴロ出土してくる。遺物の出土も少なくなってきたおり、表土からはすでに1m近く掘り下げている。（作業員8名）

11・11(金)

ここに居住していた唐木さんが現場に顔を見せる。唐木さんがここに居住して40年とのこと。終戦前まで鍛冶屋を営んでいた家だったそうで、鍛冶屋の仕事場は地下部分（現在の県道の高さからすると）にあって、出土した木箱はふいごかも知れないとのこと。また、東側から出土しているコンクリート製の桶のような物は、「もろ」替わりに使用していたとのことであった。高砂橋の架け替えは、昭和28年の3月。この際川床からの高さは嵩上げしており、当然道路面の高さもあげているとのことである。南側の県道寄りに、現在積まれている石垣はこの時に積まれたもので、調査地の調査前地盤高が、それ以前の道路の高さであったとの話を聞く。

唐木さん自身も藤沢川の氾濫による水害に何度か遭遇しているようである。

表土下約1mの深さから、鍛冶屋の「るつぼ」と思われる遺物が出土（図版5-5）する。これ以上下の層はレキ層で、遺物については出土し尽したと見て良い。（作業員7名）

11・14(月)

最終面の測量と、西側石垣の実測をおこなう。最終面の標高はH=736.94mであり、表土から約1.5m掘り下げたことになる。この面からトレンチで試掘をしてみた。56cm下がった位置に岩盤があり、現在面から下の土層は自然堆積層であろう。

午後から調査用具の片付けを行い、本日をもって現場作業のすべてを終了する。

（作業員8名）

11・15(火)

調査地の埋め戻し作業

12～1995年3月

発掘調査終了届と概要報告書の作成

〈平成6年度 発掘調査に参加いただいた方々（順不同・敬称略）〉

藤 沢 国 夫	名 和 正 一	伊 東 晃	赤 羽 清
宮 下 美咲男	(故)西村 守雄	奥 田 静 子	伊 藤 清
斉 藤 正 秀	中 山 叔 江	山 川 廣	田 中 幸 人
赤 羽 潔	加 藤 俊 幸	小 松 博 康	丸 山 まゆみ
原 健二郎	矢 沢 實	榑 東 部 建 設	

(平成7年度発掘調査)

○「番小屋遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 伊藤邸跡

月・日 調 査 日 誌

1995年

11・13(月)

発掘調査機材の搬入をおこなう。狭い場所であり、テントを張ることはできないので、機材はその都度調査地にシート掛けで管理することとする。

11・16(木)

あいさつと打ち合わせの後、調査を開始する。重機により約20cm程度表土を剥いだところで、現在まで建てられていた住宅のものと思われる土台石が出土。(第12図・図版9-1)。これらの層の中から肥前産の灯明皿 (No.64・図版23-1)、美濃産の染付皿 (No.7-1他・図版23-4) などの遺物が出土する。

午後から深さ60cm程度の試掘坑を3箇所設定し調査する。その内の2箇所で土間のたたきらしきものを確認する。(作業員18名)

11・17(金)

敷地が狭く土を置く場所がないため、試掘坑のたたきらしきものを確認した。西側の半分をその出土面まで、掘り下げ調査した。

本日の調査の中で瀬戸産の染付皿 (No.54-2他・図版23-7)、美濃産の灰釉裂片 (No.24・図版67-11) などが出土、また北西側の角に敷石と思われる2つの石を確認する。(作業員19名)

11・21(火)

前日調査した残りの部分を同じ面まで掘り下げるが、たたきらしきものは確認できなかった。終了した時点で、埋め戻し作業を重機で行う。

本日を持って現地調査作業の全部を終了する。(作業員18名)

12~1996年3月

発掘調査終了届と報告書の作成

(平成7年度発掘調査)

○「武家屋敷遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 大曾根部跡

月・日 調 査 日 誌
1995年
12・5(火)

現場へ資材搬入、テント張り。調査トレンチの設定、調査方法の打合わせをおこなう。

今回の調査地は、地形的に観ると高遠城跡の西側にあたり、藤沢川による浸食箇所の東側に造られた小段丘の住宅地である。調査用トレンチは、道路工事施工に伴って削土する、東側境界の南北の杭の東を基点として、南北28m巾1.5mを第1号トレンチとし、西側に5個のトレンチを配置し、調査を実施することにす。第1トレンチの表土の剝離作業を行ない、その下層はジョレンで掘り下げる。

表土(黒色土層)は15~20cm内外、第2層は黒色土に小礫混じり層で、25~30cm、第3層は黒褐色土層で、5cm内外であった。第4層はソフトテフラ層である。遺物の包含範囲は、主に第2層から第4層の間で主体になって出土した。遺物は古い内耳鍋の破片から、明治、大正、昭和にかけての陶・磁器片などが出土した。遺構としては、第1号トレンチの北端に、下部にぐり石が敷かれた土台の自然石を発見した。また、北の杭より16m南へ寄った地点に、第2号の集石が検出される。それより更に南へ21m程の所で、表面に一部自然石が露頭していたので、これを拡張すると東西20m南北1.2mコの字形の石の囲いが確認された。(作業員18名)

12・6(水)

本日は第3号トレンチの表土剥ぎと掘下げを行う。(作業員16名)

12・7(木)

第2号トレンチの調査を行なう。このトレンチでは、これという遺構は認められなかった。第2号トレンチは第1号トレンチと、第3号トレンチとの関連について総合的な考えの上での調査となった。第3号トレンチ出土の4・5・6号集石の測量も平行して行う。また、第5号集石の西に発見された石垣の確認調査を行なう。この遺構は南北1.5m、東西1mの方形の「もろ」で底部には厚さ5cm程のコンクリートが敷かれていた。その下部は、テフラ層であった。(作業員18名)

12・8(金)

第3号トレンチの北側10m地点に焼土と木炭片と染付磁器が発見された。この部分の細調査を行なう。焼土出土位置から、下層10cm程の位置に「寛永通宝」と、鉄軸の陶器片が出土した。その他に第4・5・6号集石の断面測量と写真撮影を行う。また、西側第4トレンチの調査も行われたが、桜の木の根株にはばまれ、遺構などを確認することが出来なかった。その他、調査地が古くは庵があったと伝えられており、また、江戸時代侍屋敷であった場所といわれているので、侍屋敷当時に建っていた家屋の平面図が高遠には存在しているので、高遠町図書館の中村先生にお願いし、図面のコピーをしてもらった。このコピーは、堤隆庵という御殿医の住ま

いの間取り平面図で、かなり精密に書かれているので復元可能である。この平面図を参考に、ぐり石や土台石の配列を探ってみる。他に記録不足の箇所を測量と全体写真を撮る。3時過ぎから発掘用具の片付け・運搬をし、現場作業を終了する。(作業員17名)

本日の見学者、高遠町図書館の中村文彦先生、教育委員会の矢沢次長など。

12～1996年3月

発掘調査終了届と報告書の作成

《平成7年度 発掘調査に参加いただいた方々（順不同・敬称略）》

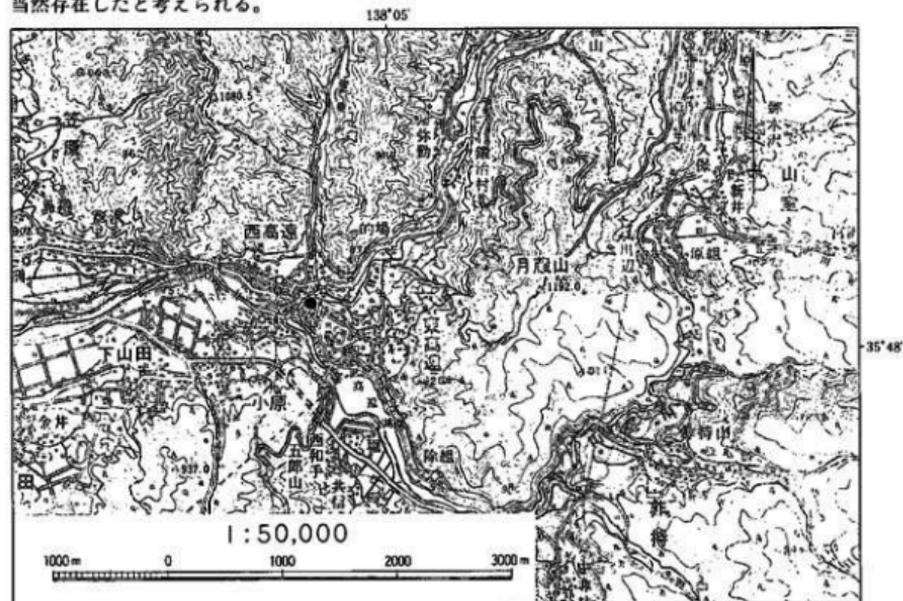
藤 沢 国 夫	名 和 正 一	伊 東 晁	小 松 孝 臣
宮 下 美咲男	奥 田 静 子	高 橋 文 明	齊 藤 正 秀
中 山 叔 江	田 中 智	井 坪 聖	山 川 庚
矢 沢 秀 雄	加 藤 俊 幸	小 松 博 康	伊 藤 隆 博
西 村 恵 子	田 中 幸 人	矢 沢 實	中 原 長 昭
南 東 部 建 設			

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

今回の発掘調査地である、長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2360番地他の地理的位置は、東経138度3分55秒、北緯35度49分に位置している史跡高遠城跡の、西側手前約1kmの地点にある。この場所には、JR飯田線伊那市駅から国道361号線により東方へ8km。また、中央東線茅野駅から杖突街道（国道152号線）にて至ることもできる。

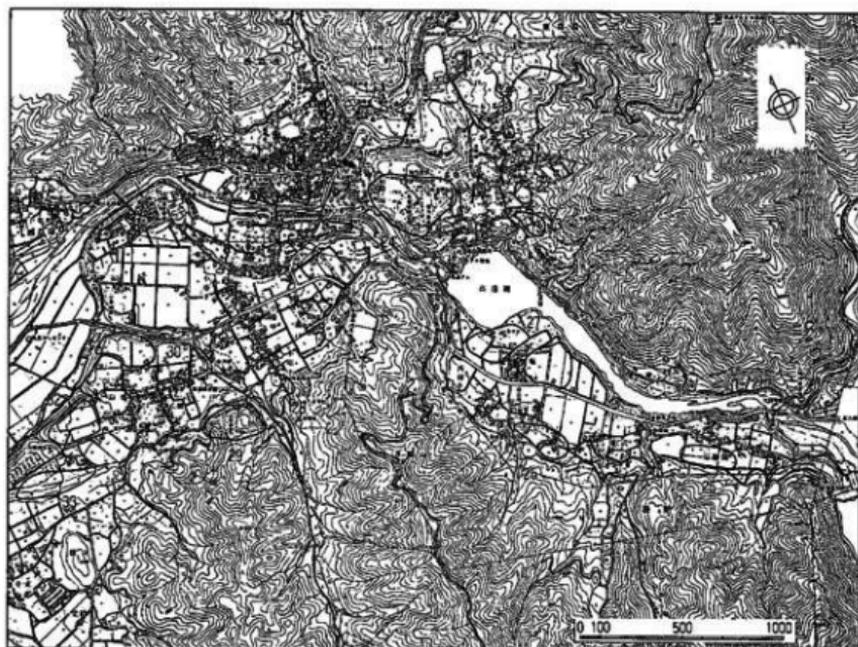
高遠は天竜川の大支流である三峰川が、赤石山脈から伊那盆地へ流れ出している谷口部に位置している。赤石山脈の西麓には中央構造線が南北方向にとおり、三峰川は赤石山脈北部の峰々から流れ下ってくるあまたの支流を中央構造線沿いの谷に集めている。一本の奔流となった三峰川は、伊那山脈の月蔵山と三界山の間を貫いて高遠城跡に出てくる。一方、中央構造線の北端にあたる杖突峠に発する藤沢川は、中央構造線に沿いながら南下して高遠に達し、三峰川に合流している。高遠城跡は、三峰川と藤沢川とが深い峡谷を穿って合流する部分に位置しており、月蔵山の西麓直下にあたる。今回の調査地は、先に述べたように城跡を形成している藤沢川の左岸川岸部分であり、標高は740m内外である。また、高遠の位置は交通の要所でもあり、中央構造線は中央高地と太平洋とを一直線で結ぶ古道として古くから用いられている。これを南北の道とすると三峰川によって東西の道が開けており、高遠は地形的にも交通の要の位置にあたる（第1図）。さらに今回の調査地は、高遠城下から登城するための主要道であり、番所が当然存在したと考えられる。



第1図 遺跡の位置図

第2節 地形・地質及び周辺の遺跡分布

1) 地形及び周辺の遺跡分布



- 遺跡名
- | | | | |
|------|------|-------|------|
| ①桂泉寺 | ②花畑 | ③高遠城跡 | ④原勝間 |
| ⑤西勝間 | ⑥堀 | ⑦後沢 | ⑧古城 |
| ⑨上堰外 | ⑩北堰外 | ⑪竹堰外 | ⑫八幡原 |
- 今回の調査地

第2図 遺跡付近の地形及び周辺の遺跡分布図

高遠町は中央構造線に沿う細長い縦谷で、南部を西流する三峰川に、藤沢川、山室川などの支流が合流して、河南地区の白山と鉾持棧道の部分で伊那山脈に横谷をうかがっている。また、西日本の内帯と外帯の接触するところであって、圧砕帯も細長く続き、伊那山脈の地塊が赤石山脈に向かって衝きあげ断層したと見られ、谷の西側、つまり伊那山脈の側は、赤石山脈の側にくらべると急傾斜となっている。

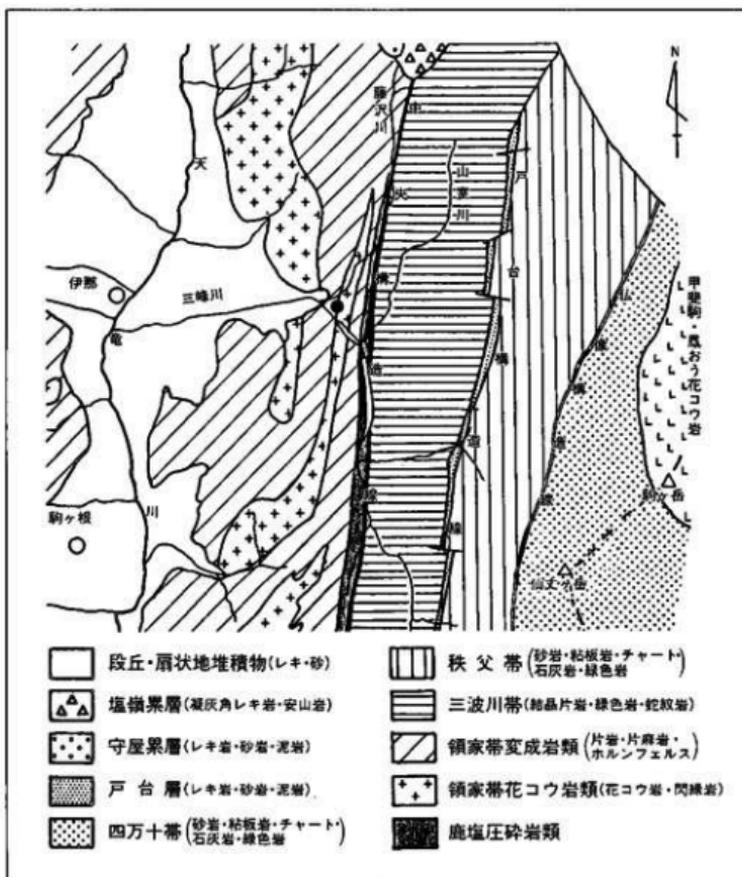
高遠城跡の堆積層は、三峰川河床から70mほど高いところにあり、長谷村中尾の段丘に連絡している。また、西高遠については河床から20～30mの高さに位置している。

高遠城跡のある月蔵山西側山麓の斜面一帯には、城跡も含めて桂泉寺・花畑といった縄文時代の埋蔵文化財も多く、近世に至るまで広い範囲の重要な歴史の礎をにぎっている一帯である。

2) 地質

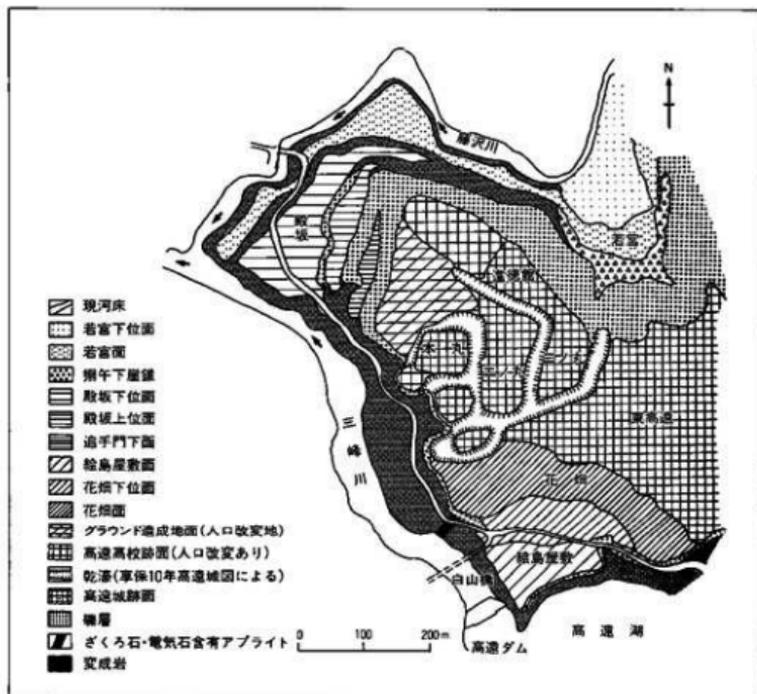
高遠町の地質は、高遠城跡の東にそびえる月蔵山の北東を、中央構造線が藤沢の谷に沿って北上することから、三波川帯・領家帯など複雑な構造をもっており、岩層の変化も激しい。河南地区は領家帯に属し、花コウ岩系統のものが大部分を占め、三義地区は三波川帯で、結晶片岩、蛇紋岩等が分布している。高遠城跡はこれらの地質帯のうちにある。

高遠ダムの高遠城跡側面に露出している大きな岩が、黒雲母花コウ岩である。この黒雲母花コウ岩が広くこの辺一帯の底盤となり、この岩盤の上部に伊那礫層と呼ばれる層が堆積し、更にその上にテフラが堆積した地層である。高遠城もこの上に構築されたのである。



○今回の調査地

第3図 遺跡付近の地質概界図



第4図 高遠城跡の地形・地質図

3) 高遠城跡の地形

城跡のある台地は、三峰川が形成した扇状地の扇頂部にあたり、扇状地形成後は侵食を受けて台地となった。したがって、三峰川と藤沢川に面する侵食崖は急峻であるものの、台上はきわめて平坦な地形を保持している。とくに、城跡の部分は北西に向かって半島状に突き出ている、周辺をとりまいている山と谷の中で、ひときわ平坦な地形になっている。この地形をつくっているのは、かつての扇状地の表層に堆積したテフラ層に起因し、テフラの堆積によって平坦地形が形成されている。三峰川扇状地は高遠を扇頂としており、高遠から天竜川に至る扇中央部の長さが10km、また、天竜川に面して連続している扇端部の延長距離は12kmで、扇状地の面積は25.5km²におよぶ伊那谷では最大規模の扇状地である。

高遠城跡においては、扇状地をつくっている礫層の上に御嶽第1テフラが被覆する。第1テフラの下位には粘土質の古土壌が堆積している。これらの地層は10～13万年くらい前の地層であることから、扇状地はそれより前に完成している。三峰川扇状地は中期更新世(70万前から13万年前までの間)を通じて形成してきた扇状地である。13万年前頃から以降は三峰川の侵食作用が活発となり、扇状地は開析されはじめて現在の地形形成が始まっている。高遠城跡の地形面区分を中心にした地形・地質図が第4図である。

第3節 歴史的環境

高遠には平安時代の末頃から、この付近を支配する領主の居城があったと言われている。また、周辺の伊那市美すず笠原の蟻塚城や、高遠長藤薬場の城山なども中世の城跡と考えられているが、その城主など判然としていない部分が多い。

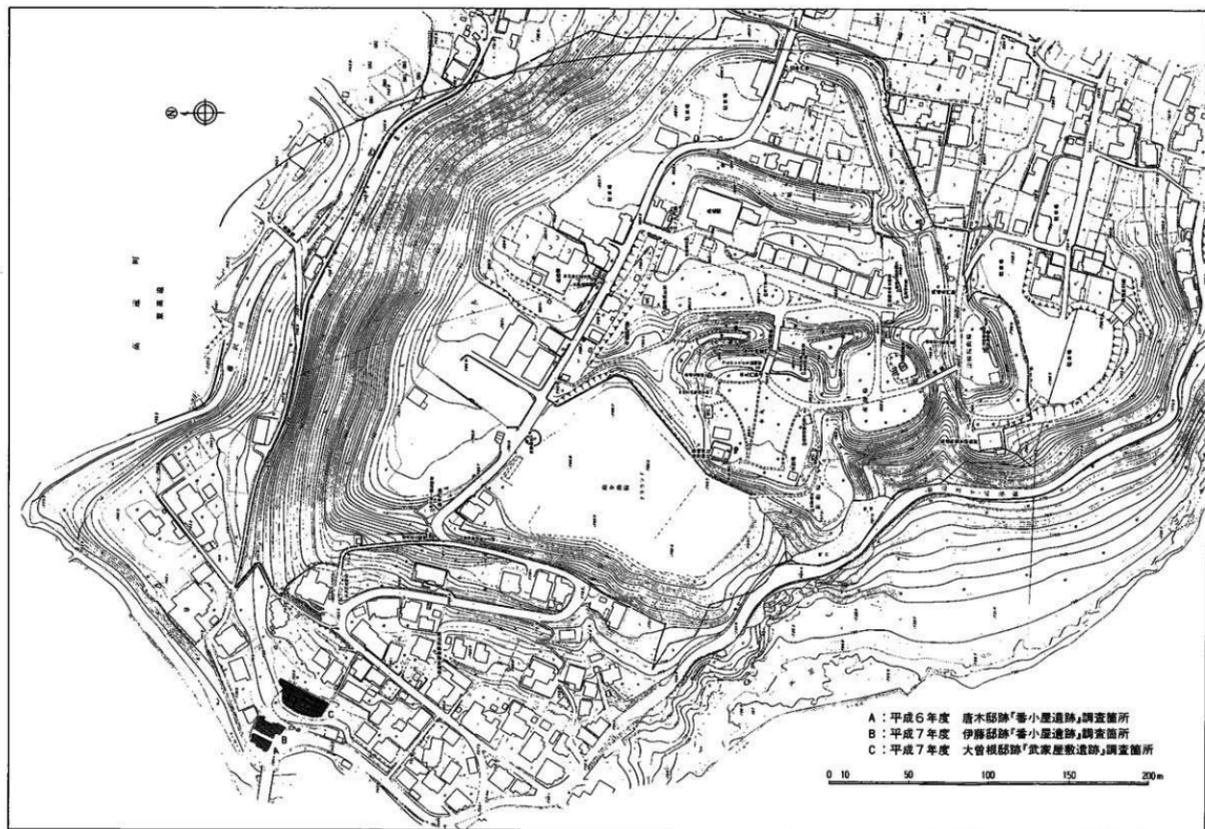
江戸時代に古銭を発掘した東高遠浅間矢場にも、豪族の居館があったと伝えられているし、同じく殿坂に根小屋の地名が残っているので、この辺に領主の居館があり段丘の上に砦があったのではないかという説もある。南北朝の時代から、高遠氏が7代にわたって高遠の領主であったが、その居城もはっきりしていない。

高遠城を現在の位置に築城した確實の史料と言われているのは、武田信玄側近の臣、高白斎が記した『高白斎記』である。これには天文16年(1547年)3月のところに『高遠山の城蹴立』とある。これは信玄が全くの処女地に築城したのか、あるいは信玄に滅ぼされた高遠氏の居城地を拡張改修したのか明らかではないが、当時築城技術に優れていた山本勘助の縄張りによっておこなわれたと伝えられ、本丸西側の一面には「勸助郭」の名が今も残っている。これらのことから高遠城は信玄が築城したと考えられている。

築城以来武田氏(35年間)、保科氏(53年間)、鳥居氏(53年間)、幕府領(2年間)、内藤氏(182年間)と、約350年にわたり南信濃地方の中心として繁栄した城である。

高遠城の歴史を見ると、信玄が築城をはじめたわずか35年後の天正10年2月下旬には、織田信忠の5万の大軍は伊那谷を北上し、武田の諸城を落として進軍し、高遠城を囲んだ。時の城主弱冠20余歳の仁科五郎盛信(信玄の五男)は、3000の兵とともに断固として孤城にたてこもって奮戦したが、3月2日多くの城兵とともに花と散った。その壮絶な戦いの様はまさに特筆すべき戦国悲史として、この地に生々しく語り伝えられている。

廃藩となり明治5年城は解体され、城内の建造物、樹木、城地の一部が払い下げられ、明治8年には有志がここを借り受けて公園とした。城郭址は当時の縄張りの様相をとどめており、昭和48年5月26日国の史跡としての指定を受け、その指定理由として「三峰川と藤沢川の合流点にある段丘先端部に築かれた平山城で、きわめて戦国的な城郭の構えをとどめている。」とある。また、三ノ丸地籍には、同時に史跡に指定された「進徳館」が、昭和56年に解体復元され現存している。史跡内には、明治のはじめ頃から、元高遠藩の馬場であった「桜の馬場」から、移植されたりして植え始められたコヒガンザクラがあり、今の老木はその時に植えられたもので、4月には1,500本余りの桜が、愛らしいピンクの花を開き、人々の目を楽しませている。昭和35年にはこのコヒガンザクラ樹林が、長野県の天然記念物に指定されており、現在観桜期間中に訪れる観光客は約30万人に達し、入場者のピークは1日3.5万人を越える。さらに年間では65万人を数え、交通網の整備などが手伝って、年々県外からの観光客の増加が目立っている。



第5図 発掘調査箇所位置図

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

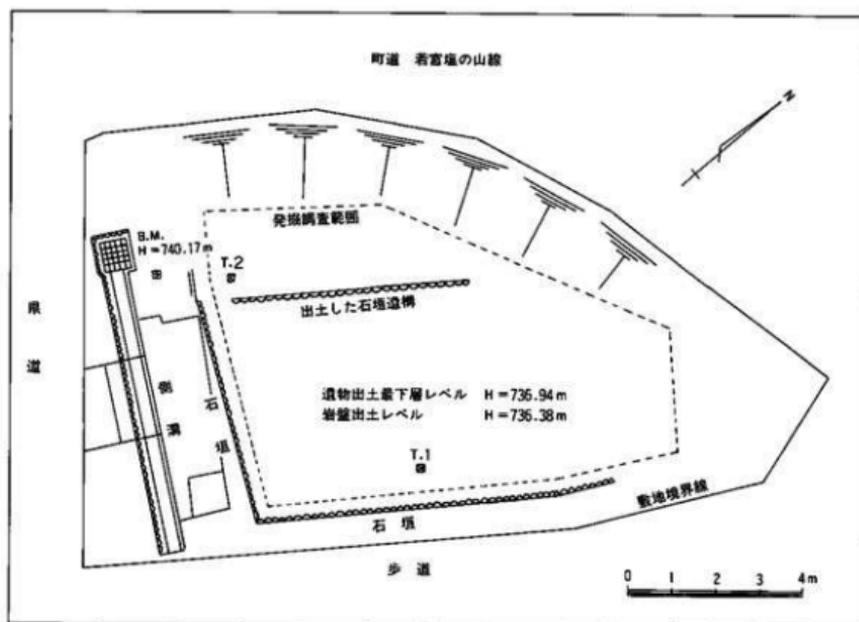
(平成6年度発掘調査)

○「番小屋遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 唐木邸跡 (第5・6図)

今回の緊急発掘調査は、史跡高遠城跡外ではあるが、都市計画街路事業の高砂橋架替工事と、国道152号線道路改良事業東高遠工区の2つの事業により遺跡が消滅するので、事前に発掘調査を実施し、遺構の確認と記録・保存を図ることを目的としておこなわれた。

この地籍には史跡高遠城跡に関わり、高遠城が成立していた当時、番小屋らしき建物があったとされる場所で、調査地である高遠町大字東高遠2360番地は、調査対象面積にすると約100㎡と狭いことと、三方を道路に囲まれ、すでに調査前の地盤高が、高砂橋の標高から1.8m下がった位置で、石垣に囲まれた地形であった。調査中の安全確認のため、土手に勾配を付けながらの作業であったため、最終面の面積は約48㎡となってしまった。また、この地盤高が昭和28年の高砂橋架け替えまでの路盤高であったと言われている。

調査は、平成6年11月7日から11月14日までの実質6日間を費やして実施された。調査の進行状況並びに調査方法などについては、第Ⅰ章の中で報告しているので参照されたい。



第6図 平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況平面図

(平成7年度発掘調査)

○『番小屋遺跡』 史跡高遠城跡指定地外 伊藤邸跡 (第5・7図)

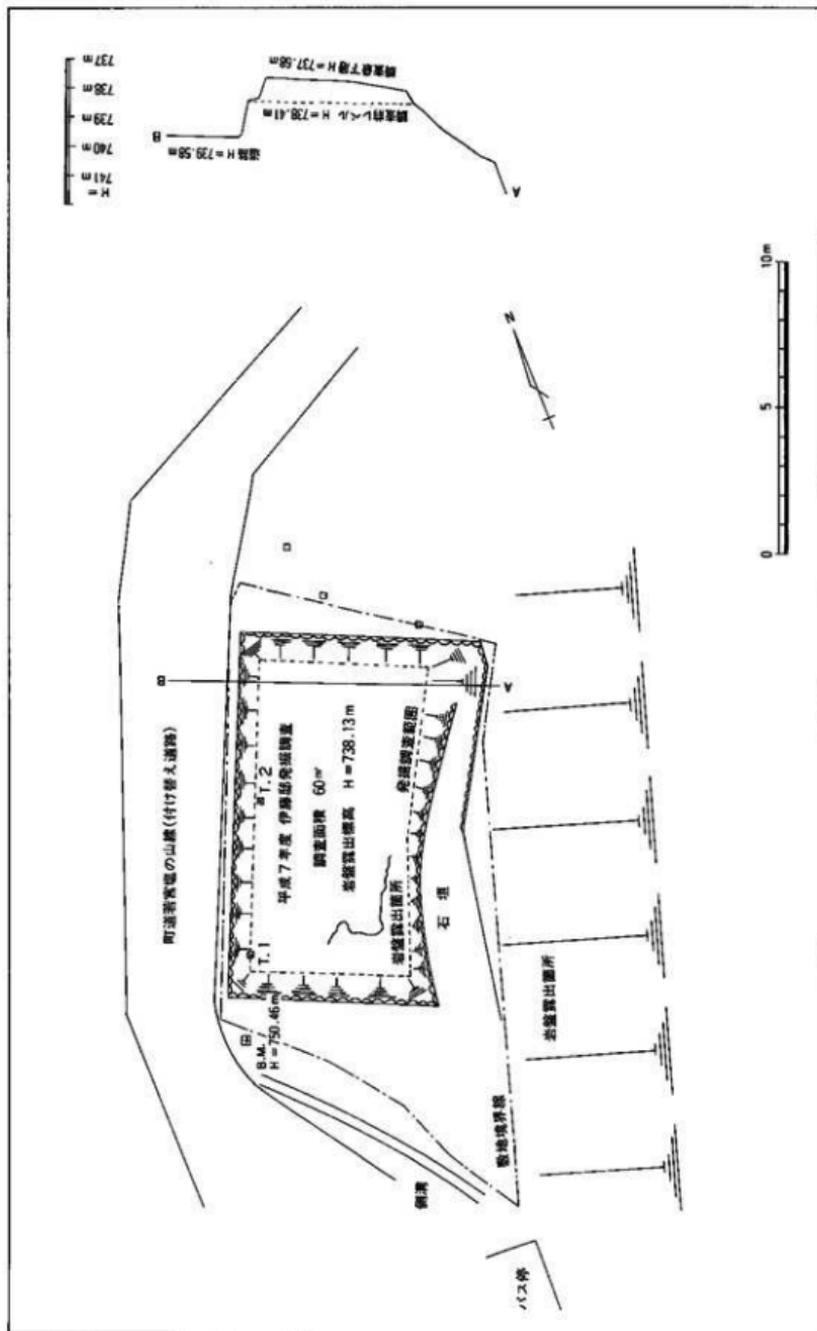
この緊急発掘調査は、平成6年度に引き続き、主に国道152号線道路改良事業東高遠工区工事により遺跡が消滅するので、事前に発掘調査を実施し、遺構の確認と記録・保存を図ることを目的としておこなわれた。

この地籍は、平成6年度に実施した番小屋遺跡である唐木邸跡の東隣りに位置し、高遠城が成立していた当時、番小屋があったとされる場所で、調査地である高遠町大字東高遠2359番地は、調査対象面積では約60㎡と狭く、三方を道路に囲まれ、すでに調査前の地盤高が、唐木邸と同じく高砂橋の標高から2.4m程下った位置で、石垣に囲まれた地形であった。安全に配慮するために土手に勾配を付け、土の移動をしながら東西に分けて作業を進めた。また、この地盤高が昭和28年の高砂橋架け替えまでの路盤高であったと言われている。調査は、平成7年11月16日から11月21日までの実質3日間を費やして実施された。調査の進行状況並びに調査方法などについては、第1章の中で報告しているので参照されたい。

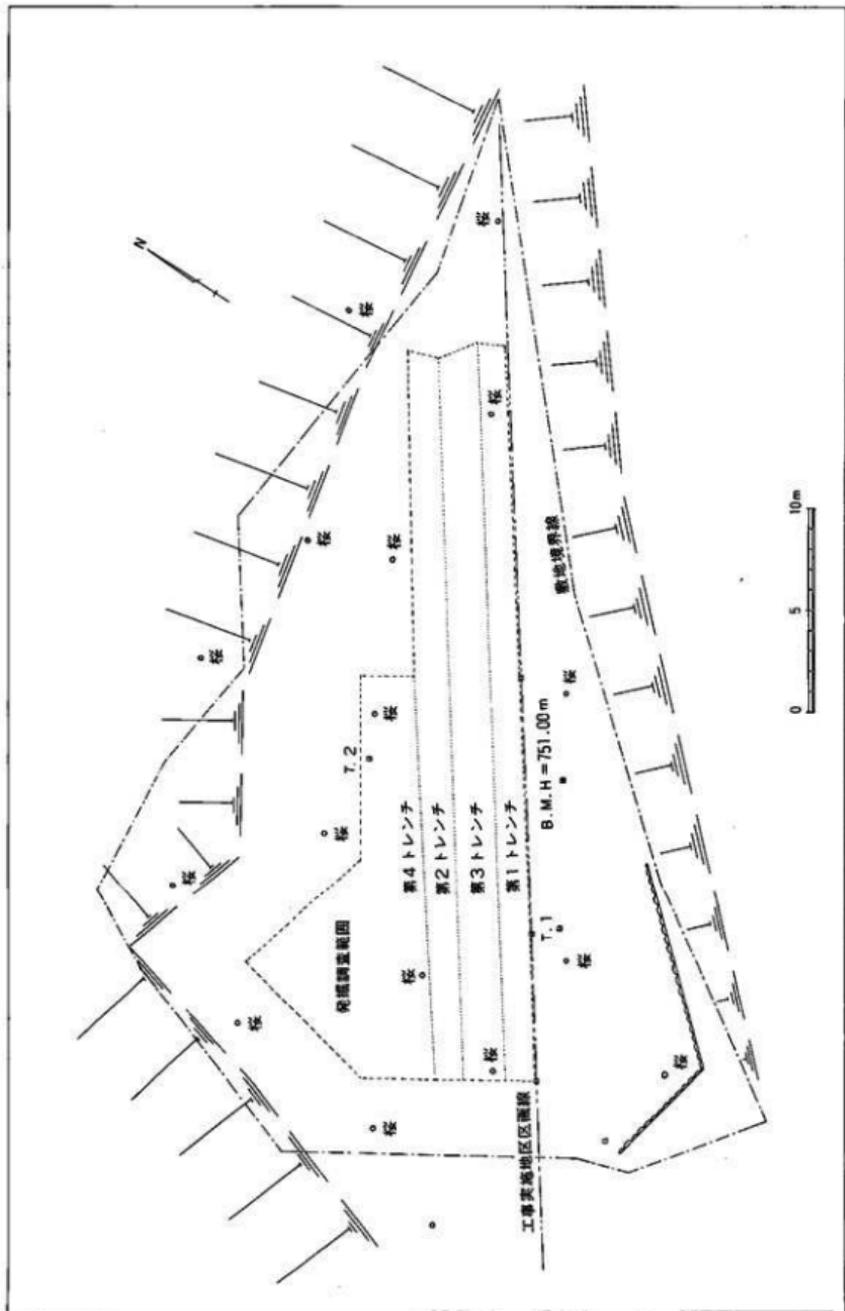
○『武家屋敷遺跡』 史跡高遠城跡指定地外 大曾根邸跡 (第5・8図)

この緊急発掘調査は、主に国道152号線道路改良事業東高遠工区工事により、道路拡幅のため削土することにより遺跡が消滅するので、事前に発掘調査を実施し、遺構の確認と記録・保存を図ることを目的としておこなわれた。

この地籍は、第21図に見られるように鳥居氏から内藤氏にかけての1960年頃書かれたと思われる絵図の中で、相頓寺という寺があったと示されている場所であり、第23～26図にあるように江戸時代後期には武家屋敷として経過してきている場所である。調査地である高遠町大字東高遠2047-1並びに2047-2番地は、藤沢川の河岸段丘上にあり、調査対象面積では約270㎡、調査前の地盤高は、高砂橋の標高から約11m上がった所に位置する。調査は、平成7年12月5日から12月8日までの実質4日間を費やして実施された。調査の進行状況並びに調査方法などについては、第1章の中で報告しているので参照されたい。



第7図 平成7年度 伊藤邸跡「香小屋」遺跡、発掘調査状況平・断面図



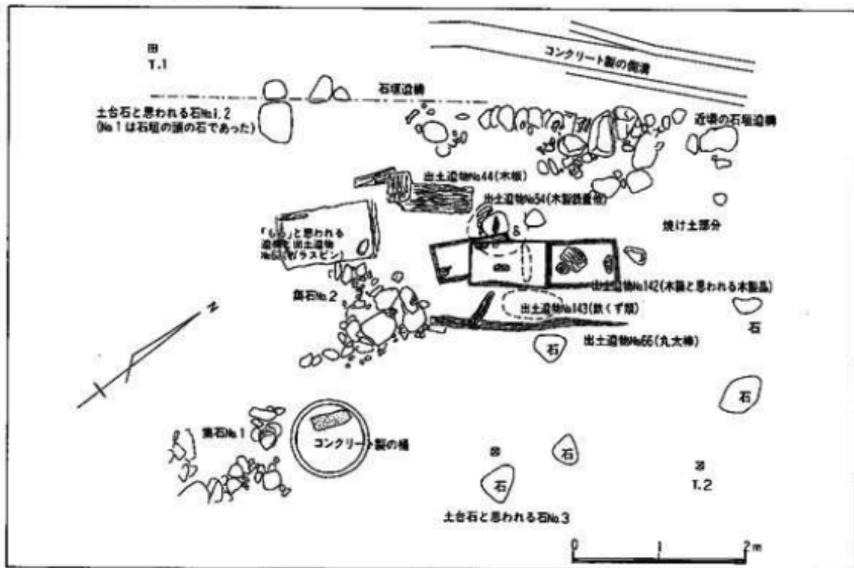
第8図 平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷跡」発掘調査状況平面図

第2節 遺 構

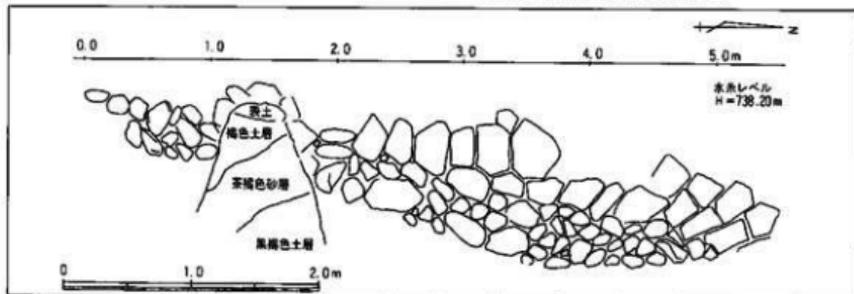
(平成6・7年度発掘調査)

- 「番小屋遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 唐木邸跡
- 史跡高遠城跡指定地外 伊藤邸跡

昭和に入ってからのも家土台石等の遺構は発見できたが、高遠城に関わる遺構は特に発見できなかった。場所が藤沢川沿いであり、豪雨等の時、以前の高砂橋に流木等が絡み、幾度となく災害をうけた場所である。昭和の中頃までは水害に見舞われていたとのことで、藤沢川の砂が堆積された層が見られた。



第9図 平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」遺構出土状況平面図



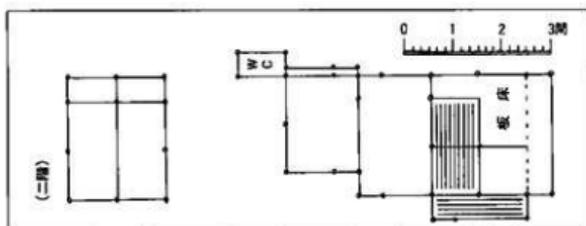
第10図 平成6年度唐木邸跡「番小屋遺跡」石垣遺構出土状況実測図

(平成6年度発掘調査)

- 『番小屋遺跡』 史跡高遠城跡指定地外 唐木邸跡 (第9～11図)

第9図は表土下約20cm位から確認された遺物等である。これらの物は唐木さんから直接聞いた話によると、大正から昭和初期まで下屋を使って営んでいた鍛冶屋場の跡であると思われる。

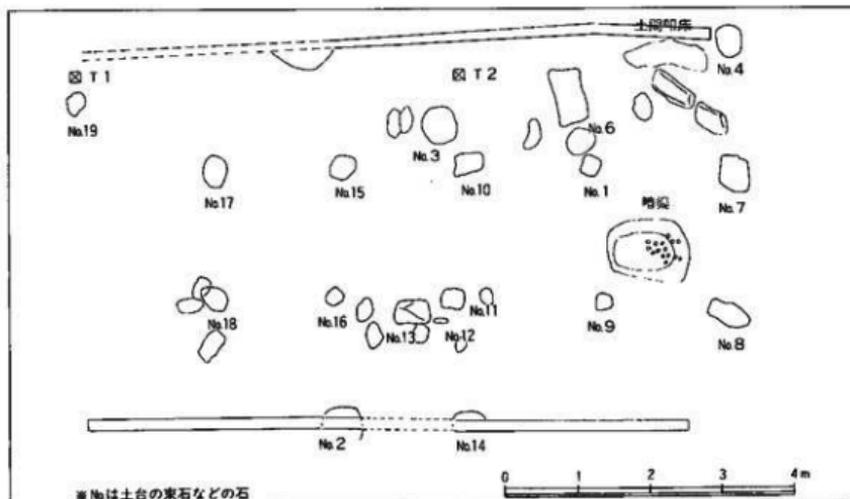
また、第10図は同レベルから下層に表土下1.3m程積まれている石垣跡である。これについては現在機能していず、遺物などから同時期の下屋の土留めにして積まれていた石垣ではなかろうか。鍛冶屋場跡とともに埋設されてしまったものと思われる。参考のために昭和33年に調査された家屋の平面図(第11図)を付す。



第11図 唐木邸間取り図(昭和33年調査)

(平成7年度発掘調査)

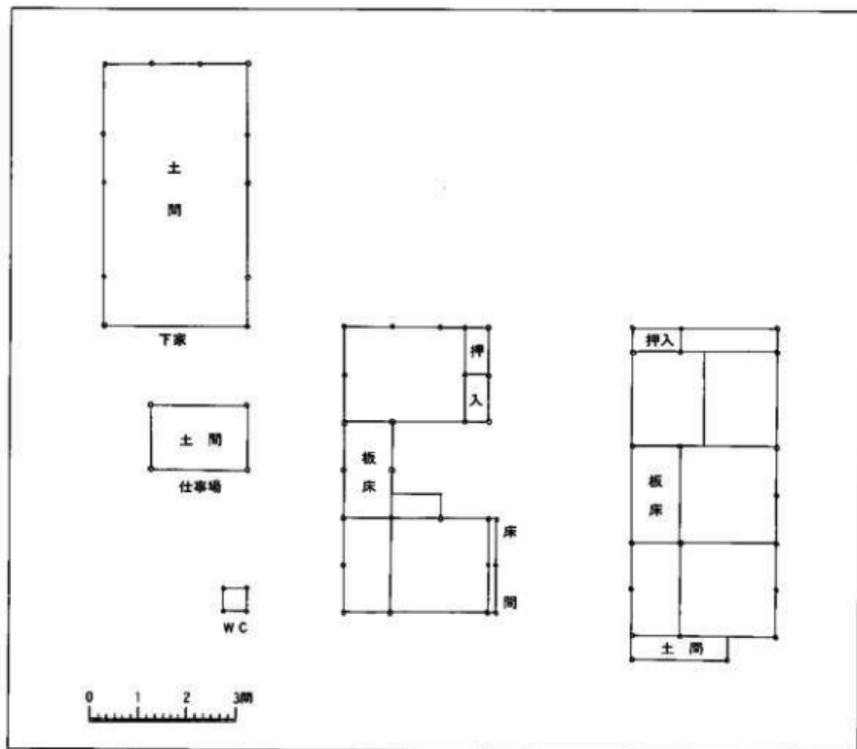
- 『番小屋遺跡』 史跡高遠城跡指定地外の伊藤邸跡 (第12・13図)



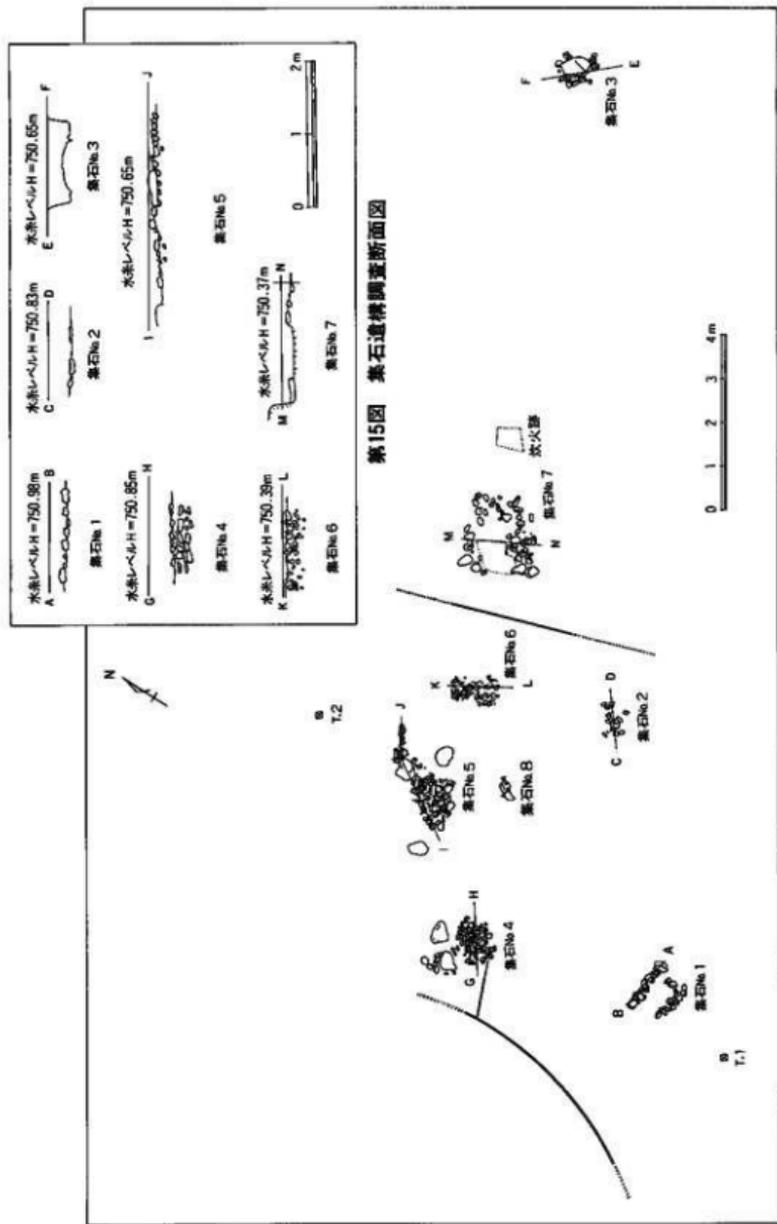
第12図 平成7年度伊藤邸跡「番小屋遺跡」出土状況平面図(第1レベル黒線・第2レベル以下赤線)

第12図中黒線の遺構は、調査直前まで建てられていた伊藤さんの住宅の東石である。表土下約20cmのところ出土した遺構で間口19尺分、奥行4間分にあたる14個の東石と、間口両側の石上には土台の角材が認められた。第13図の昭和33年調査の平面図によると下屋部分は、間口19尺分、奥行6間半分であり土間となっているので、敷地の状況からみて南側に1間半分伸びると思われる。また、第12図中赤線の遺構は、上記東石遺構下に確認された石等である。土間のたたき床と思われる部分の近くから文久永寶（No.15、第21図、図版10-4）などが出土しており、調査地中央付近の表土から27cm程掘り下げた所から完全な形の灯明皿（No.64、第19図、図版10-4）が確認された。

また、北側中央付近に1.2m×0.8m、深さ約30cmの、河原の小石をつめた暗渠と思われる遺構も出土している。



第13図 伊藤邸間取り図（昭和33年調査）



第15図 集石遺構調査断面図

第14図 平成7年度 大曾根部跡「武家屋敷遺跡」遺構出土状況平面図

(平成7年度発掘調査)

○「武家屋敷遺構」 史跡高遠城跡指定地外 大曾根邸跡(第14・15図)

本遺構で特記すべきは、高遠城の侍屋敷が所在していたという記録が、鳥居氏時代の高遠城武家屋敷図に見えるところと、それ以前に寺が所在したと言われている所である。これらの遺構が廃藩後百余年を経過しているわけであるが、これを念頭において調査を行った。

1. 第1号集石

第1号トレンチ内からは、トレンチの北端に径50×40cm厚さ15cm内外の緑色岩の土台石と、土台石を支えるぐり石と思える第1号集石が発見された。しかし、この周囲は調査を実施出来なかったため、建物に関する資料として今後の研究を待ちたい。

2. 第2号集石

本集石は、第1号トレンチの16～17m程の地点に発見された遺構である。

3. 第3号集石

第3号集石は、21m程の場所に発見された集石遺構である。遺構は一部の集石が表面に露頭している程極浅い所に認められた。遺構の規模は東西に1.5m、南北に1.2mのコの字形の集石で、現在のところの集石の持つ意味を認められない状況である。

出土遺物

4. 第4号集石

第3号トレンチの21mの地点に検出された集石である。集石の規模は東西1.2m、南北1m、集石の深さは約30cmで、集石の石質は緑色岩と、硬砂岩が主である。集石の大きさは6～15cm大の円礫が多かった。これらの集石は土台石を支えるぐり石である。土台の石は取り去られていた。

5. 第5号集石

本集石は第3号トレンチの17～18m区間に検出された集石である。この集石は南北1.6m、東西3.5mの集石である。この集石は調査の結果土台石に関わるぐり石ではなく、ただ単なる集石であることで決着した。この5号集石の北端に動いていない土台石が検出されており、この下部には多くのぐり石が存在していた。土台石は東西40cm、南北50cm、厚さ12cm程の平盤の自然石が、南北の方向に一列並びに認められた。

これは土台の下に並べられた施設的なものではないかと考えられる。

6. 第6号集石

本集石は16m付近の第3トレンチ内に発見された集石である。集石は東西1.2m、南北60cm程の東西に細長い集石で、集石の深さは10～20cm程と浅かった。建造物の土台のぐり石とは早速考えられない集石であった。また、この集石は4号、5号集石より一段低い箇所に発見された所は注目されるところである。

7. 第7号集石

この集石は第3トレンチの12mの地点に発見された集石遺構である。この遺構は東西1.5m、南北1.8m程で、周辺を10～25cm内外の自然石に方形に囲まれた遺構である。現段階では建物に直接関わる施設かどうか判然としないので、今後の研究に待ちたい。

8. 焼土遺構

第7号集石の北側10m地点に検出された遺構である。この焼土は、小砂礫混じりの黒色土層の最下部に位置し、その規模は約60cm四方に広がっていた。表面には焼土、灰と、栗材らしい木炭片が発見され、この面以下12cm程下層に鉄釉陶器の破片が検出された。また、それから下層10cm程の所より「骨」の一部が発見された。この骨片は整理の段階で再調査したいと考えている。これらの発見から江戸時代の前半頃の遺構ではないかと考えられる。

第3節 遺物

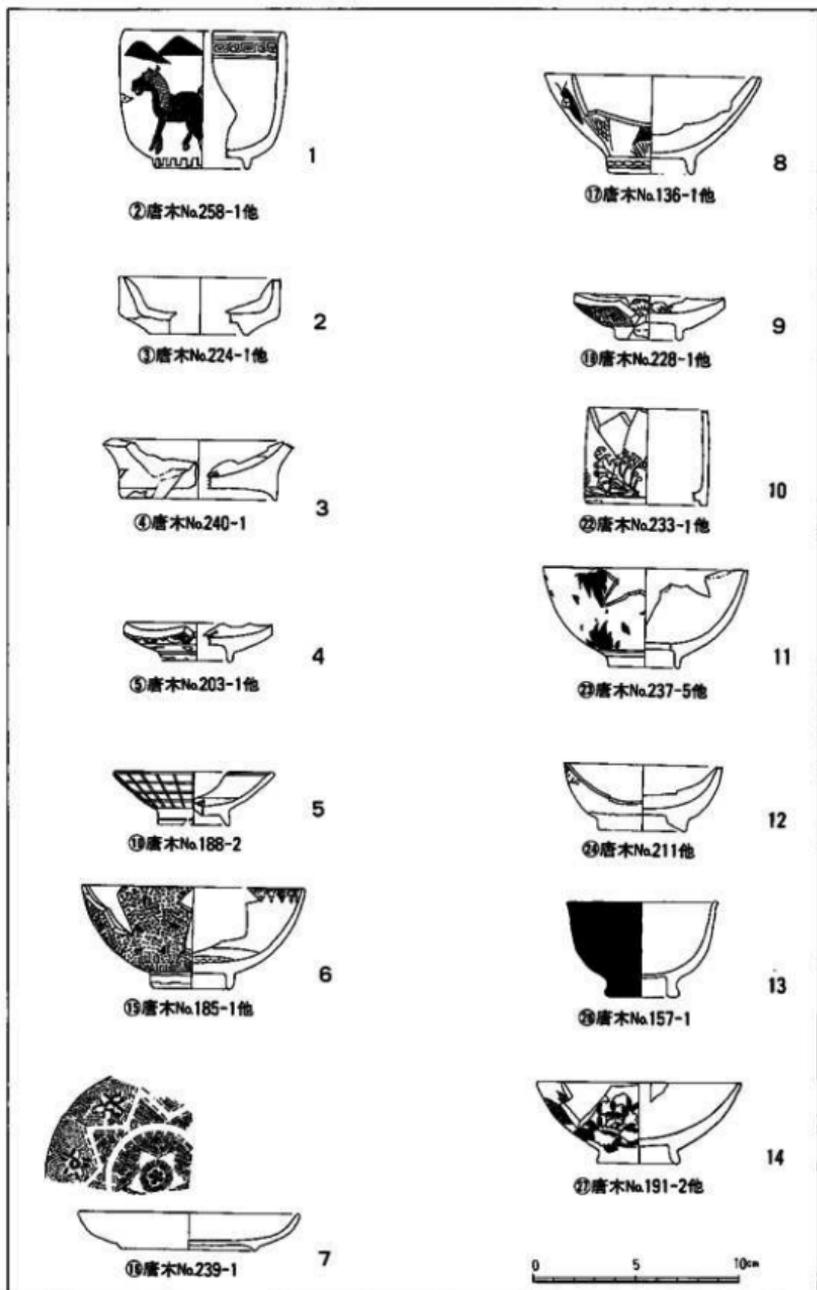
(平成6年度発掘調査)

○「番小屋遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 唐木邸跡

△陶・磁器片	407点	△ガラス	7点
△鉄製品	84点	△その他	18点
△木製品	10点	他	526点

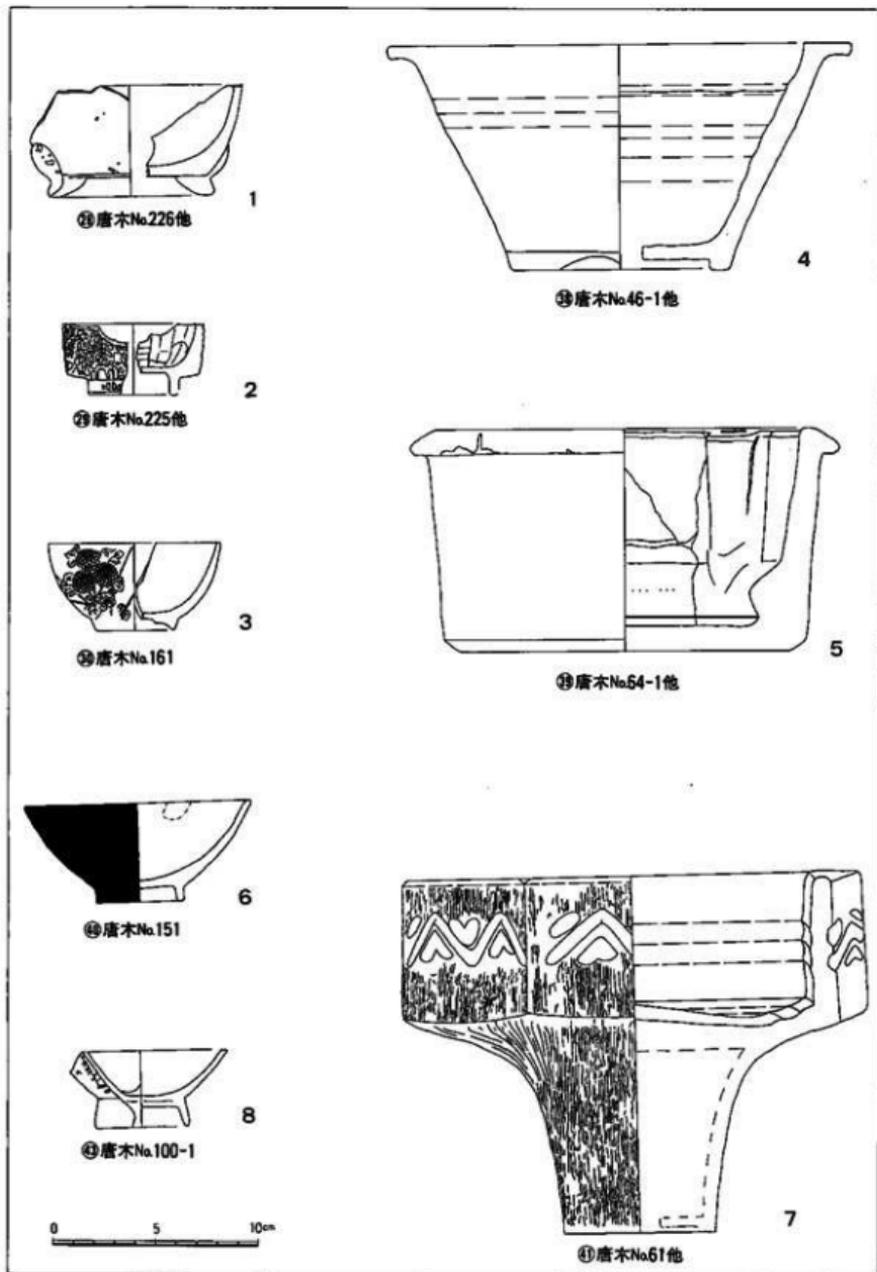
遺物番号	器種	産地	時期
1. 197	磁器、皿、染付	肥前	18世紀中期
2. 258	磁器、茶碗、染付	肥前	18世紀後半
3. 224-1	陶器、水注、柿釉	美濃	18世紀末
4. 240-1	陶器、広東碗、染付	瀬戸	18世紀末
5. 203-1 他	磁器、皿、染付	美濃	19世紀
6. 232	陶器、摺鉢、鉄釉	瀬戸	19世紀末
7. 249	陶器、甕、銅緑釉	瀬戸	19世紀末
8. 258-4	陶器、摺鉢、鉄釉	信楽	19世紀末
9. 174-2	陶器、徳久利、漆黒釉	不明	19世紀初期
10. 188-2	磁器、皿、染付	美濃	19世紀末
11. 109-1 他	磁器、皿、染付	瀬戸・美濃	19世紀初期
12. 118	磁器、碗、染付	美濃	19世紀中期
13. 246-12	磁器、茶碗、染付(摺絵)	美濃	19世紀中期
14. 196-2	磁器、徳久利、染付(摺絵)	美濃	19世紀中期
15. 185-1 他	磁器、碗、染付(摺絵)	美濃	19世紀末
16. 239-1 他	磁器、皿、染付(摺絵)	美濃	19世紀中期
17. 136-1 他	磁器、碗、染付	美濃	19世紀中期
18. 228-1 他	磁器、皿、染付(摺絵)	美濃	19世紀中期
19. 123	磁器、皿、染付	肥前	19世紀中期
20. 215-9 他	磁器、皿、染付(摺絵)	美濃	19世紀中期
21. 101	陶器、鉢、素焼	不明	19世紀中期
22. 233-1 他	磁器、徳久利、染付(摺絵)	不明	19世紀末
23. 237-5 他	磁器、碗、染付	不明	19世紀末
24. 211 他	磁器、煎茶碗、染付	美濃	19世紀末～20世紀初期
25. 103-2	陶器、植木鉢、緑色長石釉	高遠焼	20世紀中期
26. 157-1	陶器、茶碗、鉄釉	万古焼	20世紀中期
27. 191-2 他	磁器、碗、染付	美濃	20世紀中期

28. 226	他	陶器、鉢（三足）、長石釉	不明	20世紀中期
29. 225		陶器、茶碗、ホツホツ釉	美濃	20世紀中期
30. 161		磁器、湯呑茶碗、染付	美濃	20世紀中期
31. 116		陶器、鉢、綠色釉	高遠焼	20世紀中期
32. 51-1		陶器、甕、鉄釉	不明	20世紀中期
33. 169-1		陶器、ふた、素焼	不明	20世紀中期
34. 152-1	他	磁器、碗、染付（摺絵）	美濃	20世紀中期
35. 213		磁器、徳久利、染付（摺絵）	美濃	20世紀中期
36. 235-1	他	磁器、茶碗（赤絵）「壽福」	不明	20世紀中期
37. 204-1	他	磁器、青色釉、銅釉チラシ	不明	20世紀中期
38. 46-1	他	陶器、楕木鉢、鉄釉	不明	20世紀中期
39. 64-1	他	陶器、鉢、長石釉、鉄釉	高遠焼	19世紀末
40. 151		磁器、碗、鉄釉	不明	20世紀中期
41. 61	他	陶器、高台付鉢、赤色釉	不明	20世紀後期
42. 61-1	他	陶器、鉢、青色釉	肥前	20世紀後期
43. 100-1		磁器、鉄茶碗	瀬戸	20世紀後半
44. 37		鉄器、器種不明	地元	20世紀
45. 210		鉄器、るつば、鉄	不明	20世紀中期



第17図 平成6年度 唐木部跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物実測図(1)

※○番号は第3節の遺物に照合、No.は遺物番号



第18図 平成6年度 唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物実測図(2)

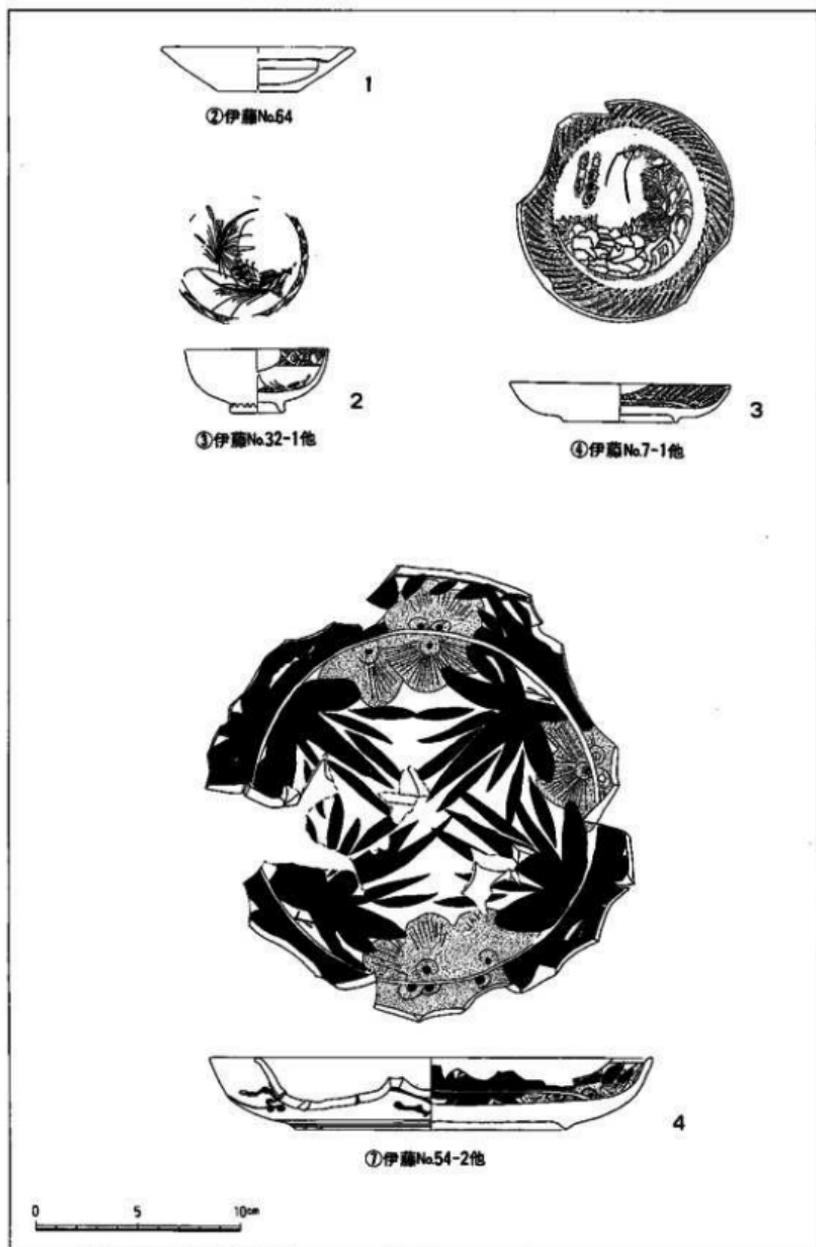
※○番号は第3節の遺物に照合、Noは遺物番号

(平成7年度発掘調査)

○「番小屋遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 伊藤邸跡

△陶・磁器片	137点	△ガラス	2点
△木製品	2点	△古銭	9点
△石製品	1点	△その他	18点
		計	169点

遺物番号	器種	産地	時期
1. 64	陶器、灯明皿、灰釉	肥前	19世紀後期
2. 7-4	磁器、皿、染付	美濃	19世紀末
3. 32-1 他	磁器、皿、染付	美濃	19世紀後期
4. 7-1 他	磁器、皿、染付	美濃	19世紀後期
5. 61-2	磁器、茶碗、染付	不明	19世紀後期
6. 57	陶器、茶碗、赤褐色釉	不明	19世紀後期
7. 54-2 他	磁器、皿、染付	瀬戸	19世紀中期
8. 65-2	陶器、甕、灰釉、錆釉	不明	20世紀初期
9. 3	磁器、鉢、染付	不明	20世紀中期
10. 12	陶器、甕、銅緑釉、鉄釉	地元	20世紀中期
11. 24	陶器、甕、灰釉	美濃	20世紀中期
12. 19	磁器、茶碗、染付	美濃	20世紀中期
13. 21	陶器、摺鉢、鉄釉	不明	20世紀中期

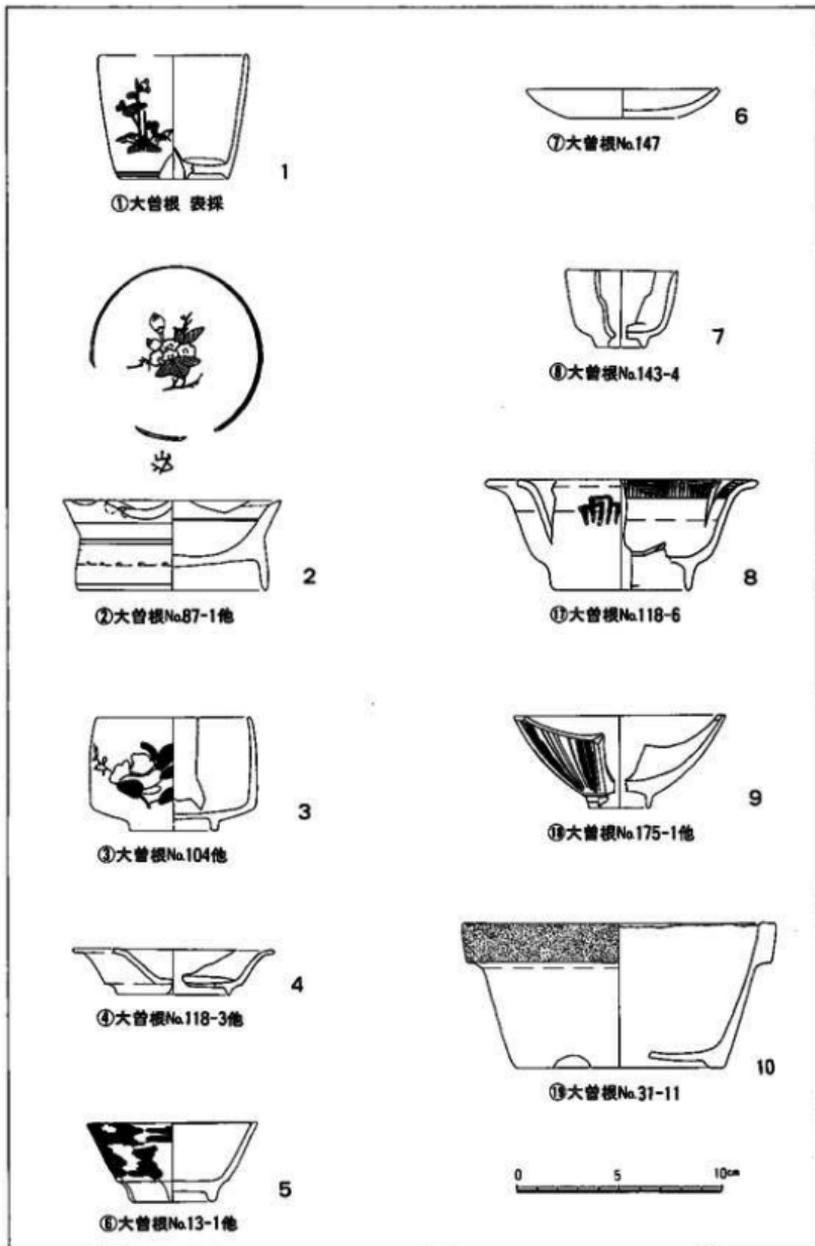


第19図 平成7年度 伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物実測図
 ※○番号は第3館の遺物に照合、Noは遺物番号

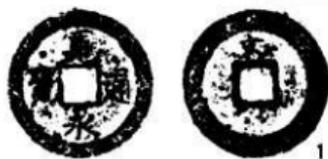
『武家屋敷遺跡』 史跡高遠城跡指定地外 大曾根邸跡

△陶・磁器片	762点	△ガラス	7点
△木製品	6点	△その他	8点
△金属製品	2点	計	785点

遺物番号	器種	産地	時期
1. 表採	磁器、湯呑茶碗	肥前	18世紀後期
2. 87	磁器、鉢、染付	肥前	18世紀後期
3. 104 他	陶器、茶碗、染付	美濃	19世紀初期
4. 118-3	磁器、皿、灰釉	不明	19世紀後期
5. 163-41	陶器、ふた、鉄釉	不明	19世紀後期
6. 13-1 他	磁器、茶碗、赤鉄釉	美濃	20世紀初期
7. 147	陶器、皿、土器	不明	20世紀初期
8. 143-4	磁器、杯、白磁	不明	20世紀初期
9. 87-4	磁器、碗、青磁	不明	不明
10. 94-1	陶器、甕、土器(カキ目)	不明	20世紀初期
11. 80	陶器、甕、鉄釉	美濃	19世紀中期
12. 77-1	磁器、皿、赤絵	瀬戸	19世紀末~20世紀初
13. 表採	磁器、茶碗、染付	肥前	19世紀初期
14. 40-1 他	磁器、皿、染付	瀬戸	20世紀中期
15. 表採	磁器、鉢、染付	瀬戸	20世紀初期
16. 表採	陶器、摺鉢、鉄釉	常滑	19世紀後期
17. 118-6 他	磁器、鉢	瀬戸・美濃	20世紀後期
18. 175-1 他	磁器、茶碗	瀬戸・美濃	20世紀後期
19. 31-11	陶器、素焼き植木鉢	不明	20世紀後期



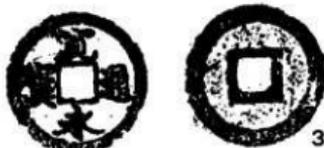
第20図 平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査出土遺物実測図
 ※○番号は第3節の遺物に照号、No.は遺物番号



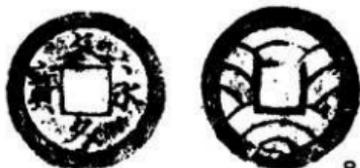
唐木No.236(正徳4年-1714年)



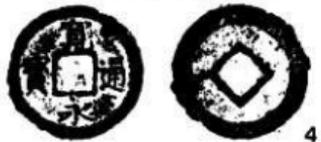
大曾根No.201



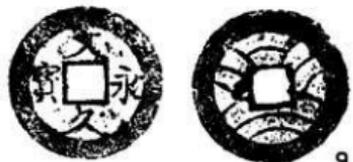
伊藤No.29(明歴元年-1655年)



伊藤No.15



伊藤No.26(元文元年-1736年)



伊藤No.39

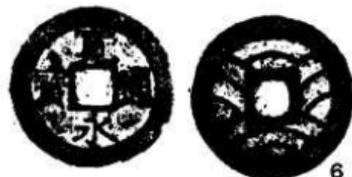


5

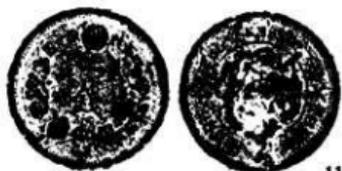
伊藤No.36(明和5年-1768年)



伊藤No.53



伊藤No.17(明治6年-1873年)



伊藤No.42



伊藤No.49(明治6年-1873年)



第21図 発掘調査出土遺物拓本(古銭)

所 見

(平成6年度発掘調査)

○「番小屋遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 唐木邸跡

この調査は都市計画街路事業の、高砂橋架替工事と、国道152号線道路改良事業東高遠工区の二つの事業に伴う埋蔵文化財保護のための、事前緊急発掘調査である。これら発掘調査で知り得た二、三の成果並びに問題点について述べ、所見とした。

1. 本地籍が、高遠城に通じる道にあった、番小屋の一部ではないかとされている場所であること。
2. この地籍は、高遠城の北側地区に露頭している基盤岩(変成岩)に阻害され、藤沢川が西南の方向に、基盤岩に沿いつつ、若宮地籍から殿坂地籍まで若宮層が分布している。今回の調査地は、若宮層の南端にあつている。この地籍は、若宮層と殿坂下層が重なりあつている地層で、藤沢川の若宮砂礫層と、殿坂下層のテフラ混じり砂礫層が混在している複雑な地層である。(第4図)
3. この箇所は、藤沢川の度々の水害に遭っていると言われている所で、最近では昭和36年の災害の時、床下まで浸水したと唐木勲次郎さんは語ってくれた。この地籍の東側に歩道があるが、古い道路はここを通っており、昭和28年に新しい高砂橋が竣工してからは、西側に高い石垣を設け、それに沿って現在の新しい道路が開けられたのである。今回の調査はこの三角地籍が対象であった。
4. 遺構について

現在の表土を除去すると、その下からぐり石の上に建造物の東石が検出された。この東石の層の下部を掘下げて調査すると、中央部の北側に40×40cm、高さ5cm程の周囲を板で囲んだ箱形のもが発見された。続いてその南に併行した形で90×45cm、深さ15cmの板で作られたものが検出された。また、その南側に80×50cm、深さ15cm、板の厚さ5cmの箱形の物件も検出された。いずれも内部は砂で充満しており、内部からは何の遺物も発見されなかった。これらの遺構は「テンバ」に使用された施設であると思われる。この唐木邸は住宅平面図でみると、下部が下屋構造になっている。周辺の出土遺物もつば、鉄さい、鉄板、鉄くず、鉄釘などが数多く発見されており、調査の結果から唐木さん宅は大正時代から昭和初期頃までこの下屋を利用して鍛冶屋を営んでいたようで、これらの遺構は鍛冶屋場であったと考えられる。しかし、江戸時代当時に関係すると思われる遺物は発見されなかった。

その他には、江戸時代近辺に作られたと思われる遺物が発見されているので、高遠城が成

立していた当時、何らかの施設があったことは充分考えられる。

5. 遺物について

遺物の中で陶器、磁器の類が時代の分類対象となるが、他の遺物は早速分類できず、後日明らかにしたいと考えている。陶磁器は、明治・大正・昭和の時期のもので、江戸時代の遺物と思われるものは多くは確認できなかった。

調査の結果も含めて、今回の調査地の近くが番小屋ではないかと判断されるので、今後も機会があったら調査を希望したい。今回の調査にあたっては伊那建設事務所の係の方々、近くに居住しておられる収入役さんを始め、町役場関係の方々、図書館の中村文彦先生ほか、多くの方から助言を頂いた事につきまして、心より深く感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。

(平成7年度発掘調査)

○「番小屋遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 伊藤邸跡

この伊藤邸跡の調査も、平成6年度に実施した唐木邸跡と同様の条件下にあるので、それらの調査要領を踏まえて調査が行なわれた。調査の結果、伊藤さんの住宅の東石が間口19尺分、奥行4間分にあたる、14箇所東石と、その周囲に土台の角材が認められた。

これらの施設を取り払って、その下層を掘り下げ調査したが、江戸時代の番小屋の遺構と思われるものは発見できなかった。また、調査地北西の位置からは、古い叩床と敷石が検出され、その近くから寛永通寶や、文久永寶など江戸時代の古銭が出土し、その他に古い遺物としては、灯明皿、染付の陶器皿など、江戸時代後半に位置付けられる陶磁器が発見されている。

これらの遺物からして、江戸時代の施設に関係したものと考えざるを得ない。

(平成7年度発掘調査)

○「武家屋敷遺跡」 史跡高遠城跡指定地外 大曾根邸跡

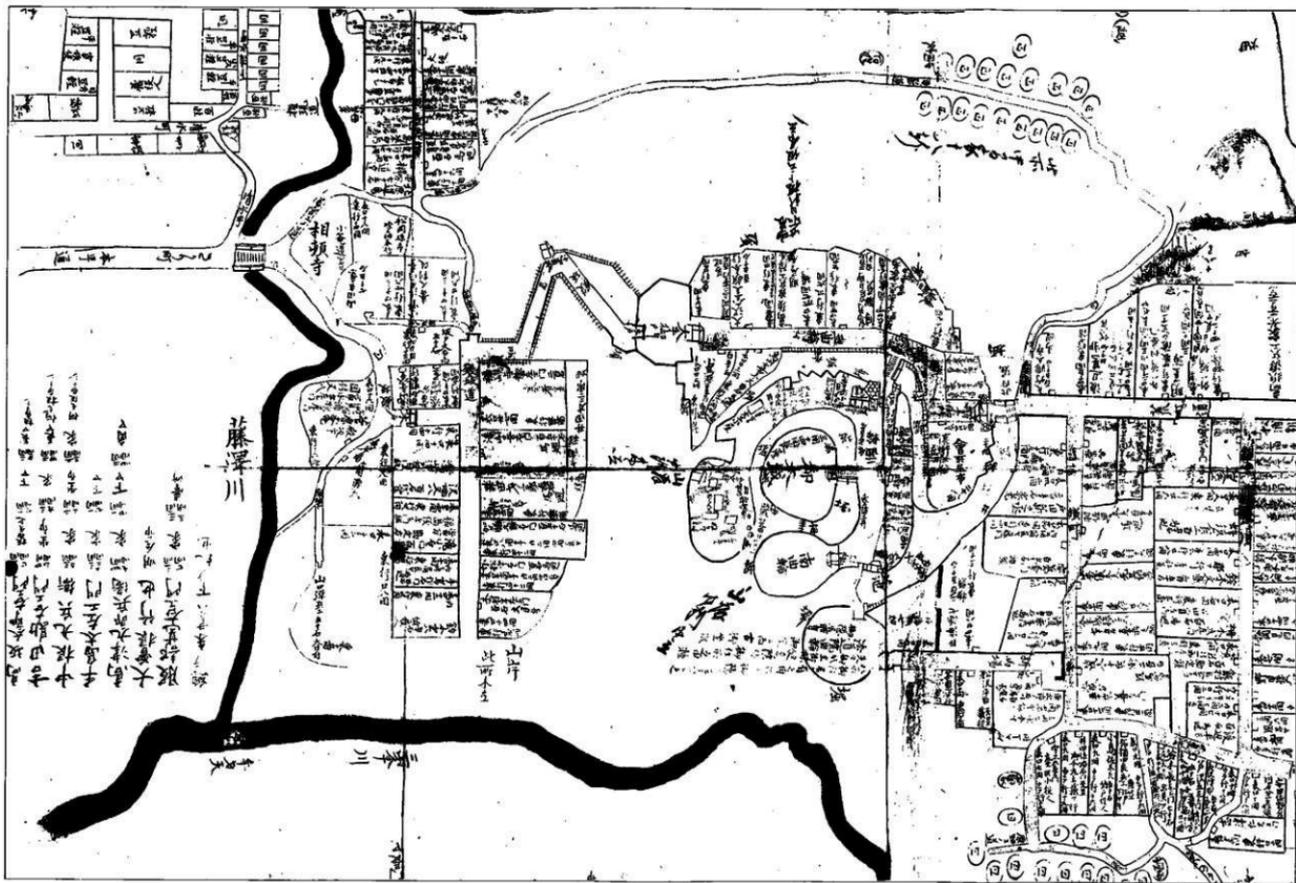
本遺跡は、高遠城の侍屋敷が存在していた場所として注目されてきた遺跡である。

調査にあたっては、遺構や遺物の出土の状況に注意が注がれた。今回の調査区域からは6箇所施設のぐり石と思われる集石の遺構が検出された。これらは、ぐり石の配置から侍屋敷に関わる遺構であると判断できず、誠に残念な結果ではあったが、今回の調査は工事のため取り去られる道路敷部分の用地であって、東側に残す住宅地の後日の調査に望みをつないでいるところである。

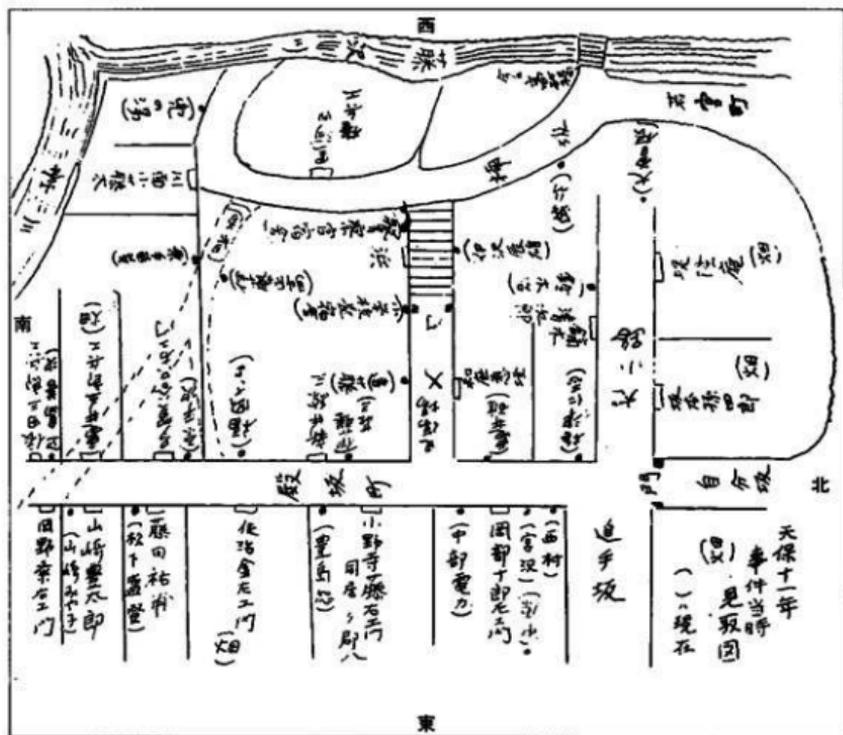
また、今回出土している遺物は表採ではあるが、肥前産で時期は18世紀の茶碗や染付の鉢などの遺物(第20図・図版25)や、灰釉の皿など江戸時代の遺物が検出された。その他、江戸末期より明治・大正・昭和の時代にまたがる遺物が採取されたので、江戸時代以降の住居が存在していたことを物語ってくれる資料となった。今回は緊急発掘で十分な遺物の分類ができなかったが、今後時間をかけてこの遺跡の遺物を再検討したいと考えている。

本遺跡をとおして、侍屋敷の資料収集には高遠町図書館の中村文彦先生のご支援が大きかったことを厚く御礼申し上げたい。また、発掘機材と調査には宮下美咲男氏の御協力を賜りましたことを感謝しております。その他役場の職員の皆様や調査に参加された方々には心より深くお礼を申し上げる次第です。

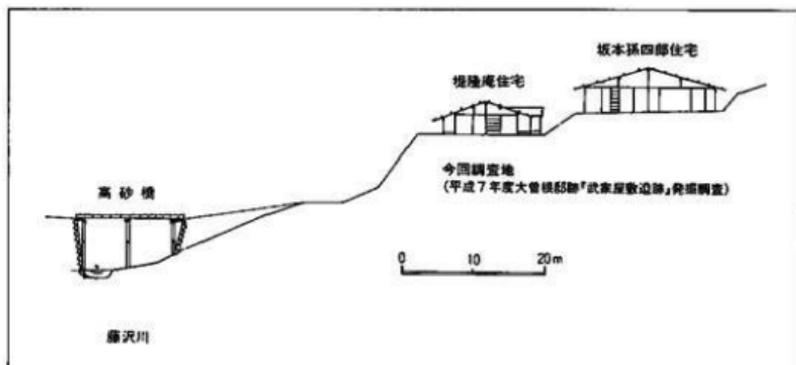
(友野 良一)



第22図 鳥居氏から内藤氏前期頃の高遠城並びに城下絵図（高遠町図書館蔵）

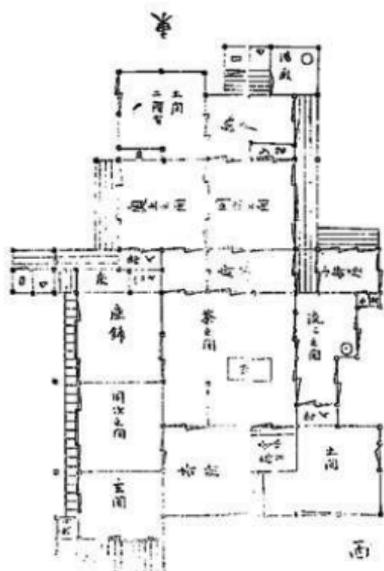


第23図 天保11年頃の「川面・多賀谷刃傷事件」当時武家屋敷見取図
 (『伊那路』S41年4月号 馬島律司著)



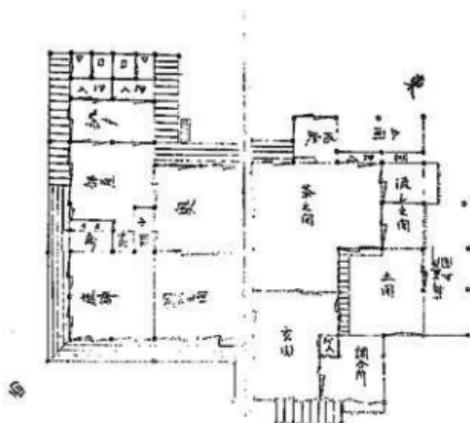
第24図 坂本孫四郎住宅、堤隆庵住宅地形断面図 (想像図)

坂本孫四郎



第25図 坂本孫四郎住宅平面図(御家中屋鋪絵図より)

堤陸庵



第26図 堤陸庵住宅平面図(御家中屋鋪絵図より)

あ と が き

今回の発掘調査並びにこの報告書を発刊するにあたり、調査団長の友野良一先生には、多忙であるにもかかわらず遠く宮田村よりご足労をいただき、調査期間は短かったものの、陣頭指揮をとる傍ら、休憩時間を惜しんで作業員の皆さんと学習会を持っていただいたり、進んで歴史調査の大切さやおもしろさを変わず教えていただきました。

今回の調査にあたっては伊那建設事務所所管の事業であるため、委託契約を結び調査を実施させていただきました。今後も国道152号線のバイパスルートは東へと伸び、その先には高遠城の武家屋敷跡とされている地区が控えているということから、伊那建設事務所の皆様には益々ご理解とご協力をいただかなくてはなりません。何とか2年越しで報告書を発刊することができ、関係者の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

また、これらの調査に参加していただきました作業員の皆さん、地元をはじめご協力をいただいた方々に、この場をお借りして感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。

高遠町教育委員会 教育次長 矢 沢 秀 雄

参 考 文 献

- | | | |
|------------|------|----------------------|
| 高遠町誌刊行会 | 1979 | 「高遠町誌（下巻 自然・現代・民俗編）」 |
| 高遠町誌刊行会 | 1983 | 「高遠町誌（上巻 歴史編）」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1984 | 「研究紀要Ⅲ」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1985 | 「研究紀要Ⅳ」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1986 | 「研究紀要Ⅴ」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1987 | 「研究紀要Ⅵ」 |
| 高遠町教育委員会 | 1988 | 「高遠城跡二ノ丸門発掘調査報告書」 |
| 高遠町教育委員会 | 1988 | 「史跡高遠城跡 保存管理計画策定報告書」 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1988 | 「研究紀要Ⅶ」 |
| 高遠町教育委員会 | 1990 | 「原勝間遺跡」 |
| 高遠町教育委員会 | 1992 | 「史跡高遠城跡二ノ丸Ⅱ」 |
| 高遠町教育委員会 | 1993 | 「金井原遺跡」 |
| 多治見市教育委員会 | 1993 | 「美濃窯の焼物」 |
| 高遠町教育委員会 | 1996 | 「史跡高遠城跡二ノ丸Ⅲ」 |

写真図版

図版 1



1



2



3

1. 発掘調査地調査前の状況 2・3. 調査中の状況

平成6年度 唐木跡跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(1)

図版 2



1. 土台石と思われる石No.2(右)
(左のNo.1は石垣の石であった)



2. 土台石と思われる石No.3



3. 出土遺物No.52
(陶器製植木鉢)



4. 出土遺物No.44 (木板)



5. 出土遺物No.66 (丸木棒)



6. 出土遺物No.54他 (木製鎮重他)

平成6年度 唐木邸跡『番小屋遺跡』発掘調査状況(2)

図版 3



1. 出土遺物No79 (鉄丸釘類)



2. 出土遺物 No80 (鉄くず類)



3. 「もろ」と思われる遺構と出土遺物
No62 (ガラスビン)



4. 焼土部分と出土遺物 (鉄釘)



4. 出土遺物 No116 (高遠焼の鉢片)



6. 出土遺物 No143 (鉄くず類)

平成6年度 廣木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(3)

図版 4



1. 出土したコンクリート製の桶



2. 集石No.1 実測中の状況



3. 石垣遺構確認のための試掘調査状況



4. 出土遺物 No.151 (磁器飯茶碗)



5. 出土した木箱と思われる木製品



6. 出土遺物 No.157 (磁反茶碗)

平成6年度 唐木跡跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(4)

図版 5



1. 出土した木箱と思われる木製品
(上部からの撮影)



2. 出土した木箱と思われる木製品
(西側からの撮影)



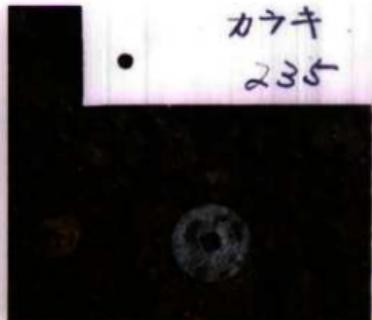
3. 出土遺物 No.166 (鉄くず類)
No.167 (磁器片)



4. 出土遺物 No.168 (コアス)



5. 出土遺物 No.210 (るつぼと思われる鉄製品)



6. 出土遺物 No.235 (古銭「寛永通寶」)

平成6年度 唐木跡跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(5)

図版 6



↑ 1. 出土最終面で出土した遺物（陶磁器片）

→ 2. 藤沢川の砂層を間に挟んだ土質断面
（上部の石はNo.1）



3. 最終面東側石垣と調査地層断面
（左下に深い藤沢川の砂の層が観られる）



4. 最終面出土した西側石垣遺構



5. 最終面からの試掘により出土した岩盤



6. 同左岩盤からの地層面

平成6年度 唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(6)

図版 7



1. 調査地発掘調査前の状況
(南側からの撮影)



2. 調査地発掘調査前の状況
(北側からの撮影)



3. 調査地東側の段丘壁に露出する岩盤(右上部分)

平成7年度 伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(1)

図版 8



1. 発掘調査中の状況



2. 発掘調査中の状況



3. 発掘調査に参加していた
方々

平成7年度 伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(2)

図版 9



1. 出土した土台石の遺構
(近年の伊藤邸の土台石)



2. 残されている住宅の根太
部分 (東側根太)



3. 試掘坑の状況

平成7年度 伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(3)

図版 10



1. 出土した岩盤と伊藤部土台石



2. 出土した岩盤の状況



3. 出土遺物 No.64 (灯明皿)



4. 出土遺物 No.15 (古銭「文久永寶」)

平成7年度 伊藤部跡「番小屋遺跡」発掘調査状況(4)



1. 発掘調査地 調査前の状況
(段丘上段が調査地大曾根跡、左側赤い屋根が伊藤邸)



2. 発掘調査地 調査前の状況

平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(1)



1～3. 発掘調査中の状況

平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(2)

図版 13



1. 出土遺構 集石No.1



2. 出土遺構 集石No.3



3. 出土遺構 集石No.4

平成7年度 大首根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(3)

図版 14



1. 出土遺構 集石No.5



2. 出土遺構 集石No.6



3. 出土遺構 集石No.8

平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(4)

図版 15



1. 調査最終面と確認できた集石遺構 (第3、第4トレンチ)



2



● 大曾根 246

3



● 大曾根 259

4



● 大曾根 301

5

2~5. 出土した遺物

平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(5)

図版 16



1. 出土遺構 集石断面調査状況 集石No.4



2. 出土遺構 集石断面調査状況 集石No.6



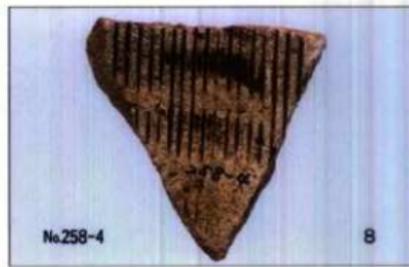
3. 出土遺構(焼土部分)と出土遺物(骨)



4. 調査最終面と確認できた集石遺構
(第1トレンチ)

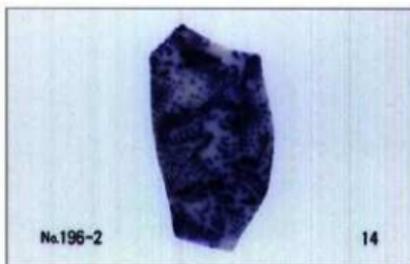
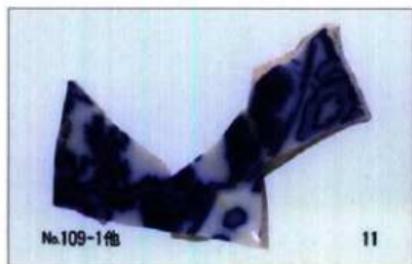
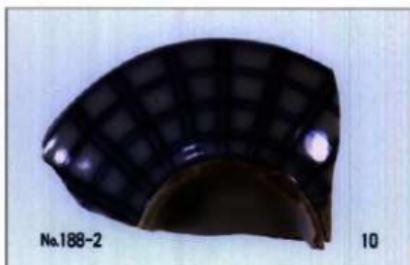
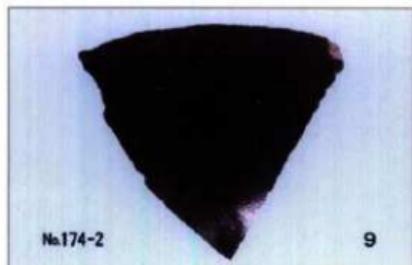
平成7年度 大曾根邸跡「武家屋敷遺跡」発掘調査状況(6)

図版 17



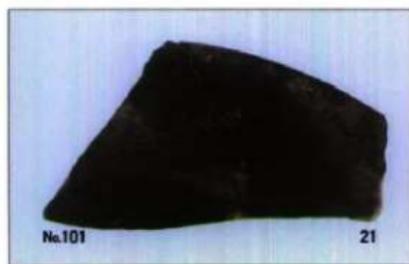
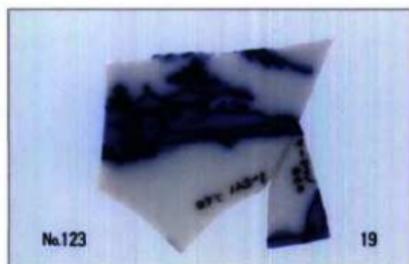
平成6年度 唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(1) ※Noは遺物番号

図版 18



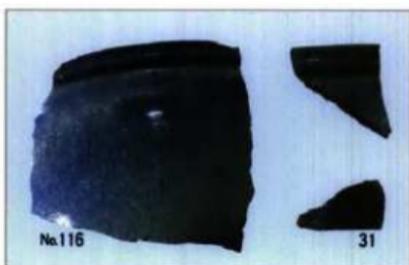
平成6年度 唐木跡跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(2) ※No.は遺物番号

図版 19



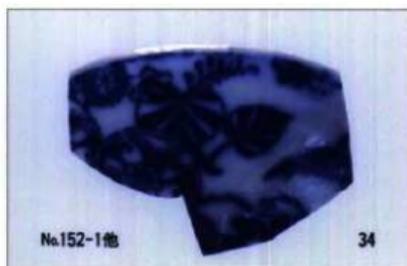
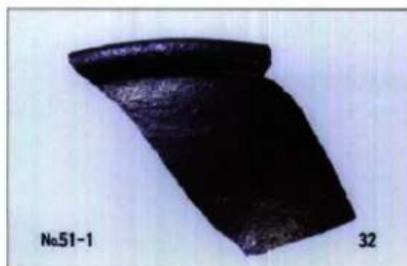
平成6年度 唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(3) ※Noは遺物番号

図版 20



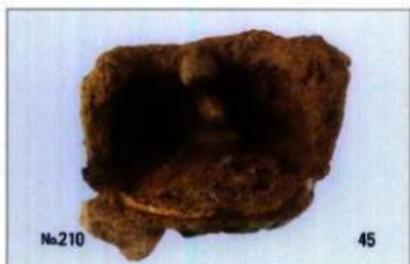
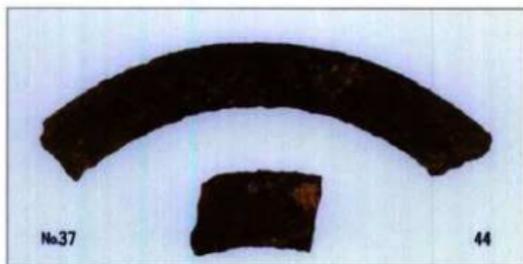
平成6年度 唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(4) ※No.は遺物番号

図版 21



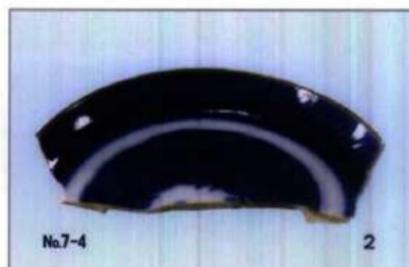
平成6年度 唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(5) ※Noは遺物番号

図版 22



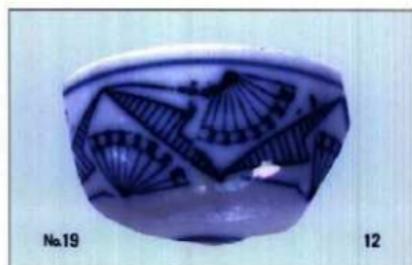
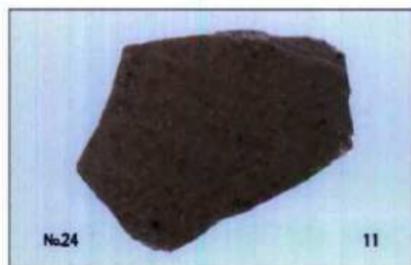
平成6年度 唐木邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(6) ※No.は遺物番号

図版 23



平成7年度 伊藤邸跡「番小屋遺跡」発掘調査出土遺物(1) ※No.は遺物番号

図版 24

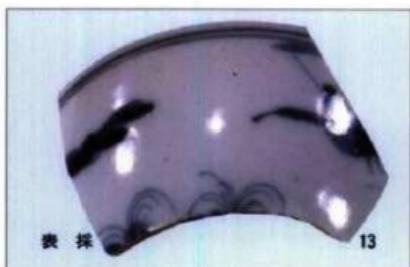


図版 25



平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査出土遺物(1)※Noは遺物番号

図版 26



平成7年度 大曾根跡跡「武家屋敷遺跡」発掘調査出土遺物(2)※No.は遺物番号

報告書抄録

ふりがな	たかとおじょう ばんご や いせき おけやしきいせき							
書名	高遠城 番小屋遺跡・武家屋敷遺跡							
副書名	都市計画街路事業高砂橋架替工事、国道152号線道路改良事業東高遠工区							
巻次								
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	友野良一							
編集機関	高遠町教育委員会							
所在地	〒396-02 長野県上伊那郡高遠町大字西高遠1806番地 ☎ 0265-94-2557							
発行年月日	西暦1996年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばんごや 番小屋 おけやしき 武家屋敷	たかとおまらどのさか 高遠町殿坂	385		35°	138°	平成6年 11月 及び 平成7年 12月	430	都市計画 街路事業 及び 国道改良 事業
	高遠町大字東高遠 2360・2359番地			49°	03°			
	高遠町大字東高遠 2047-1・2番地				55°			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
番小屋 武家屋敷	番小屋址 武家屋敷址	近世 近代 現代		なし		染付の鉢、灰 軸の皿などの 陶磁器類		遺物は江戸末 期より明治、 大正、昭和の 時代にまたがる

都市計画街路事業高砂橋架替工事
国道152号線道路改良事業東高遠区

高遠城 番小屋遺跡
武家屋敷遺跡

(唐木邸跡・伊藤邸跡・大曾根邸跡)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成8年3月

- 編集・発行／高遠町教育委員会
伊那建設事務所
- 印刷・製本／株式会社オノエ印刷
〒392 諏訪市中洲586

